正史を彷徨う

Part VI

森隆一

（吉備津神社「岡山観光 WEB」より）

序

Part VでFlood Maps による北九州の推定古代海岸線から、遠賀川河口部は筑紫湖と名付けた湖水面が現れた。さらに、J shis から、筑紫湖の部分は軟弱地盤で河内湖とよく似た状況であることを見た。さらに、投馬国は筑紫湖の南端辺、現在の中間市辺りと考えた。

図V05「奈良湖」のような図が、大阪・岡山・北九州にもできれば、新たな展開も可能ではないかと考える。

この縄文海進の他にも、参考になると思われ、気になっていた幾つかの話題がある。例えば、神社・海流・製鉄遺跡・古墳などが挙げられる。これらは、部分的には触れていたが、調べる余力がなくて出来なかった。ここでは、これらについて調べることにする。

古事記と日本書紀の神代の巻に国産み神話と言われている話が書かれている。以前に、国産み＝征服と考えられないか、あるいは、国産みの順序は征服の順序を反映しているのではないかと考えた。ただし、順番でなく、重要度の可能性も考えられる。改めて見てみると、産むのは国ではなく洲となっている。国産みでなく洲産みであって、

倭は洲を征服していったことになる。

古墳については、今まで全く触れないできた。触れられなかったと言ったほうが正確である。大きな理由は、数も多く、特徴的な前方後円墳の編年が、大和朝廷により大和(近畿地方)で発生し、大和朝廷の全国制覇とともに拡がっていったという説に(暗黙に)基づいているということと、膨大緻密な発掘報告があり、どう対処していくのかが決まらないことである。基本的な考えとして、定説から大和(近畿地方)で発生したをとり、倭王朝の日本征服とともに、発生し、広まったとすればいいのではと考えた。作業仮説とするには検討を進めることが必要で、そのため、古墳に関する基礎知識の確認のため、幾つかのキー・ワードに関し、Wikipedia で調べ、引用することにする。

対馬海峡の渡航に海流が大きな役割を果たしていることは、朝鮮半島からの漂流物が日本海沿岸に流れ着いていることからも想像がつく。調べているうちに、厳密には潮流が重要であることがわかった。この結果を引用する。

鉄も倭王朝と密接な関係があると考えている。これに関しては、「IRON ROAD ・和鉄の道」というサイトがある。いずれは、これを取

りこんでいきたいが、まずは、内容の理解を目標に、関連すると思われる記事を紹介することにする。

DNA 解析は、朝鮮半島からの渡来の波を議論できる程に発展し多様である。これに関しては、成果の適用を検討するほどには理解していないが、いくつかの記事を引用する。

13. 国産み神話の島々と神社

序

次の図 V02′ は図 V02 で、茅淳山城水門の位置紀淡海峡に移したものである。

図 V02′ 神武天皇紀にあらわれる地名

図 V02′ において、山口県・四国・淡路島・兵庫県がポッカリ空白である。日本武尊の東征の舞台は、関東・東北ではなく、中国西部・四国西部と考えられるのではないかと考えたが、これならば、吉備の西が埋まる。

日本書紀には沢山の地名が記されているが、図 V02′ レヴェルの地

名(国名)がまとまって書かれているものとして、国産み神話が挙げられる。日本書紀・古事記には天皇紀の前に神代がある。日本神話と呼ばれているものである。ここに国産み神話が書かれている。国産みを領土の拡張と見れば、東遷の情報がデフォルメされて書かれているのではないかと考える。

神代は物語風で文章が難しいため、国産みの順番を見ていくことにする。

神社については、幾つかの格付けが為されている。これらをWikipediaでしらべ、Wikipedia「名神大社 」の神階をみたあと、幾つかの神社の記事から、祭神・神階と興味ある記事を抜き出すことにする。

13.1.　国産み神話の島々(国々)

既に述べたように、国産みは国の征服であろうということから、国産み神話は東征を反映しているのではないかということを念頭において国産み神話の国々をみる。Wikipedia「国産み」には、古事記と日本書紀に書かれている国々の一覧表が書かれている。

表 VI01 国産みの順番

古事記	紀本文	一書第1	一書第2
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豐秋津洲	淡路洲・淡洲
伊豫之二名島	大日本豐秋津洲	淡路洲	大日本豐秋津洲
隱伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲
筑紫島	筑紫島	筑紫島	筑紫島
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲
津島	越洲	佐度洲	越洲
佐度洲	大洲	越洲	大洲
大倭豐秋津洲	吉備子洲	吉備子洲	子洲
吉備兒島			
小豆島			

一書第3	一書第4	一書第5
淡路洲	淡路洲	淡路洲
大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲
伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
億岐洲	筑紫島	伊豫之二名島
佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
筑紫島	億岐洲・佐度洲	佐度洲
壹岐洲	越洲	筑紫島
對馬洲		吉備子洲
		大洲

古事記では、さらに、大島・女島・知訶島・兩兒島 が続く。

表 VI01 では、図 V02′で抜けていた淡路島や四国と思われる地名が見られる。また、国は現れず洲となっている。国産みではなく、洲産みが書かれている。国という概念の成立あるいは変化が考えられる。

日本書紀はほぼ洲(国)の名を挙げているだけであるが、古事記で伊豫之二名嶋と筑紫嶋には四面があることと、亦名が書かれている。伊豫之二名嶋に四面があるのは数が合わない気もする。

まずは、古事記の記事を引用する。

淡道之穗之狹別嶋(訓別云和氣 下效此)次生伊豫之二名嶋 此嶋者身一而有面四 每面有名 故伊豫國謂愛(上)比賣 (此三字以音 下效此(也)) 讚岐國謂飯依比古 粟國謂大宜都比賣 (此四字以音) 土左國謂建依別 次生隱伎之三子嶋 亦名天之忍許呂別 (許 呂二字以音) 次生筑紫嶋 此嶋亦身一而有面四 每面有名 故筑紫國謂白日別 豐國謂豐日別 肥國謂建日向日豐久士比泥別 (自久至泥以音) 熊曾國謂建日別 (曾字以音) 次生伊伎嶋 亦名謂天比登都柱 (自比至都以音訓天如天) 次生津嶋 亦名謂天之狹手依比賣 次生佐度嶋 次生大倭豐秋津嶋 亦名謂 天御虛空豐秋津根別 故因此八嶋先所生謂大八嶋

國 然後還坐之時 生吉備兒嶋 亦名謂建日方別 次生小豆嶋 亦名謂大野手(上)比賣 次生大嶋 亦名謂 大多麻(上)流別 （自多至流以音）次生女嶋 亦名謂天一根(訓天如天） 次生知訶嶋 亦名謂天之忍男 次生兩兒嶋 亦名謂天兩屋（自吉備兒嶋至天兩屋 嶋并六嶋）

この前に

生子水蛭子 此子者入葦船而流去 次生淡嶋是亦不入子之例

が書かれている。日本書紀では、この話は一書第１にある。淡嶋から嶋をとれば、淡＝阿波が考えられる。国生みでは粟国と同じか。筑紫嶋も四面と言っているが、面に意味があるのであろうか。

ここで、日本書紀の国生みの話を引用する。一書に付いている番号は書かれていない。

日本書紀本文

先以淡路洲爲胞 意所不快 故名之曰淡路洲 廼生大日本(日本 此云耶麻騰 下皆效此） 豐秋津洲 次生伊豫二名洲 次生筑紫洲 次雙生億岐洲與佐度洲 世人或有雙生者象此也 次生越洲 次生大洲 次生吉備

子洲 由是始起大八洲國之號焉 即對馬嶋 壹岐嶋 及處處小嶋 皆是潮沫凝成者矣 亦曰水沫凝而成也

一書第 1

・・・先生蛭兒 便載葦船而流之 次生淡洲 此亦不以充兒數 故還復上詣於天・・・然後同宮共住而生兒 號大日本豐秋津洲 次淡路洲 次伊豫二名洲 次筑紫洲 次億岐三子洲 次佐度洲 次越洲 次吉備子洲 由此謂之大八洲國矣

一書第 2

二神合爲夫婦 先以淡路洲 淡洲爲胞 生大日本豐秋津洲 次伊豫洲 次筑紫洲 次雙生億岐洲與佐度洲 次越洲 次大洲 次子洲

一書第 3

先生淡路洲 次大日本豐秋津洲 次伊豫二名洲 次億岐洲 次佐度洲 次筑紫洲 次壹岐洲次對馬洲

一書第 4

以磯馭慮嶋爲胞 生淡路洲 次大日本豐秋津洲 次伊豫二名洲。次筑紫洲 次吉備子洲 次雙生億岐洲與佐度洲 次越洲

一書第 5

以淡路洲爲胞 生大日本豐秋津洲 次淡洲 次伊豫二名洲 次億岐三子

洲 次佐度洲 次筑紫洲 次吉備子洲 次大洲

筑紫嶋の四面については、9章の景行天皇紀で取り挙げた。ここには、筑紫国・豊国・肥国・熊襲国があったということである。伊豫之二名嶋には伊予国・讃岐国・粟国・土佐国があったと書かれている。これから、伊豫之二名嶋は四国と考える。伊予と粟(阿波)があり、これが同じ島とわかたのではないかと考える。ここにある面は訳がわからず、そのままにしておいた。顔としたほうが、日本語としてはいいのかもしれない。本文で挙げているのは 8 洲であるから大八洲国といったのか。

上記国々ついて、少し、考えてみよう。まずは、若干大げさな、あるいは異質な、大日本豐秋津洲を採り挙げる。

コトバンク「大日本豐秋津洲」の世界大百科事典第2版の解説では

日本国の古称。偉大な日本の豊かな実りの国の意。ヤマトは奈良県の三輪山近辺を〈山のある所〉としてヤマトの名がついたもので，以後主に都が大和に置かれたので，日本国の総称となった。アキヅシマも阿岐豆野（あきづの）（吉野郡吉野町宮滝から対岸の御園一帯か）か

ら日本国をさすようになった。雄略天皇に蜻蛉（あきづ）の功績によってアキヅシマヤマトと言えという国名起源説話の歌がある。

まず、大日本豐秋津洲における、大日本と豊は国名でもある。秋津は安芸津ではないか。秋は訓読みで安芸は音読みである。アキヅはトンボで、トンボの飛びかう島ということを見た記憶がある。難波にトンボはイメージが合わない気がしていたが、秋吉台のカルスト台地のほうがトンボのイメージにあっている。

豊と安芸は表 VI01 に現れていない。秋(安芸)と古事記にある津にわければ、秋は出雲・吉備以外の中国地方を指すと考える。津は津洲とすれば、港のある(大きな)洲となるが、筑紫島・壱岐島に続いて書かれていることから、対馬とすれば、豐秋津洲は豊・安芸・対馬を表すと考えられる。これに、オオヤマト(大倭)と筑紫・伊予を加えたものが、倭の東遷後の領域ではないかと考える。

ここで、豊をとトヨ，津をツと読むのは訓読みである。

大日本については、古事記では大倭と書かれていることから、倭王の住む邪馬台と考える。日本が正史に現れるのは(新旧)唐書で、隋書には現れないことから、日本を用いるのは唐の成立頃と考える。崇神天皇以前の天皇の和風諡号に日本が付けられているのは、この時代

に付けられたことを意味するのかもしれない。また、

(倭→)大倭→大和(→大日本)

と替わったのも日本書紀作成時辺りかと考える。本稿の立場からは、ヤマトに日本という漢字をふるのは、唐の成立した 618 年以降と考える。

表 VI01 をもう少し見ていこう。

1段目と2段目は、古事記では淡路島と四国である。日本書紀では、連勝複式を用いれば、大日本豐秋津洲と淡路島となっている。3段目と4段目は、日本書紀は、3書と5書を除き、伊豫之二名洲と筑紫洲となっている。これからは、

四国→淡路島→近畿　　(南海道ルート)

という東征(東遷)ルートが浮かんでくる。神武東征のルートは

安芸→吉備→近畿　　(山陽道ルート)

である。

神武東遷に現れる、安芸は見当たらず、吉備に関しては、一書第2・一緒第3は書かれていない。(秋を安芸とすれば、あるともいえる。)他は、吉備兒島が下段に書かれている。一書第5では、下から3段

に、筑紫島・吉備子洲・大洲が書かれている。大洲はオオズかオオシマが考えるが、他はシマなので、大島としておく。

古事記には書かれているが、日本書紀には書かれていない島(国)は、伊岐島・津島・小豆島・女島・知訶島・両兒島である。

Wikipedia「女島」には幾つかの女島が挙げられている。

女島（山口県）: 山口県下関市の響灘にある島。

女島（香川県）: 香川県東かがわ市にある島。

女島（福岡県）: 福岡県北九州市若松区にある白島を構成する島。

女島（長崎県）: 長崎県五島市にある男女群島を構成する島。

女島: 国産み神話でイザナギとイザナミが産んだ島のひとつ。別名、天一根。大分県。東国東郡姫島村の姫島に比定される。

Wikipedia「五島列島」には、

古事記の国産みにおいて、イザナギ・イザナミが大八州を生んだ後、更に児島・小豆島・大島・女島・知訶島・両児島を生むが、この中の知訶島が五島列島である。古くは福江島を(大知訶、大値嘉)と呼び、上五島の島を「こぢか」と呼んでおり、現在行政区画上ではたまたま

五島列島に入れられていないものの五島列島の一部としてその北に位置する小値賀島がその呼称の名残とされる。日本書紀天武天皇4年夏4月18日（675年5月17日）の条に、三位麻続王に罪があって因幡に流罪とした際、その子らを伊豆大島とともに血鹿嶋に流した、とある。両児島についても、五島の南西に離れて浮かぶ男女群島のことであるとするのが通説である。

と書かれている。

最後の2つ、五島列島と国東が有力と思っているが、どちらかは判断がつかない。幾つかの女島があってもいいとも思っている。

表 V02 の地名で瀬戸内海周辺にある洲(嶋・国)を図 VI01 に示す。

図 VI01 では図 V02 では吉備しかなかった瀬戸内海が埋められている。神武東征で挙げられていた安芸が現れない。神武東征で、四国は触れたくなかったのかなどが浮かんでくる。

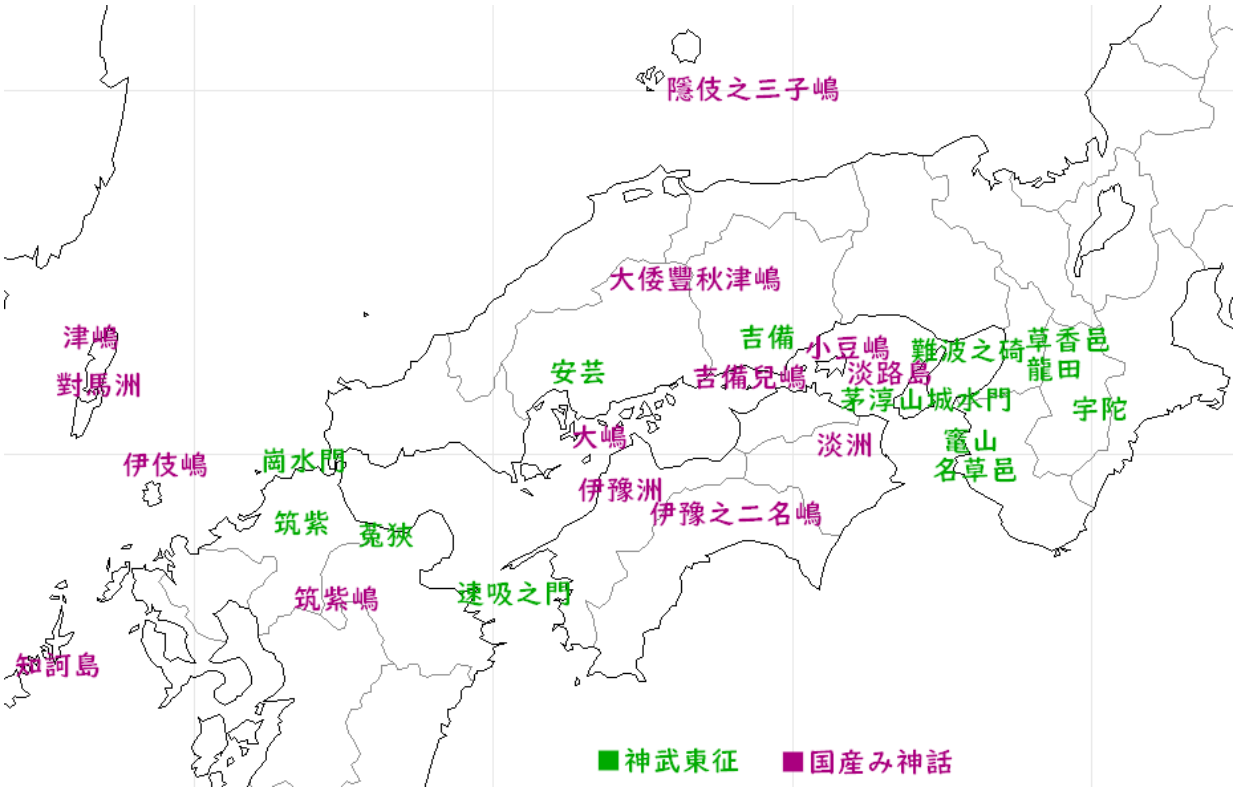


図 VI01 国産み神話の地名

13.2. 神宮と大社

神社には、神宮と大社と呼ばれているものがある。これらには古代に起源をもつものが多い。

三国史記新羅本記には

炤知麻立干九年 487 置神宮於奈乙 奈乙始祖初生之處也

奈乙に神宮を置く。奈乙は始祖生誕の地である。

があり、新羅では始祖を祭るものであったようだ。崇神天皇紀には、神宮と出雲大神宮の用例があるが崇神天皇紀の記事をそのまま用いることは問題である。

Wikipedia「神宮」では

日本書紀では、伊勢神宮・石上神宮・出雲大神宮(出雲大社を指す)のみが神宮と記載されていた。その後、平安時代に成立した延喜式神名帳では、大神宮(伊勢神宮内宮)・鹿島神宮・香取神宮が神宮と表記されている。

と書かれている。今のところ、崇神天皇紀以外に上記 3 神宮が書かれ

ている箇所を把握していない。日本書紀の完成した 720 年頃では伊勢神宮・石上神宮・出雲大神宮であった神宮が、900 年頃には大神宮（伊勢神宮内宮）・鹿島神宮・香取神宮にかわったのは面白い。石上神宮は物部氏と関係が深い神社で、吉備との関係も指摘されている。出雲神話は国譲りで有名である。古代の地形は糸島と似ていることは前に述べた。倭の構成部族か、韓の諸国のどれかが、先に移住していたことが考えられる。出雲は製鉄でも知られている。倭国大乱で製鉄集団を傘下に持つ部族が移住して建国されたとも考えられる。吉備の倭王朝と不可侵条約を結んだのではないか。このとき、倭の五王が求めた爵位は有効であったと考えられる。一方、鹿島神宮・香取神宮は中臣氏との関係が深い。

また、Wikipedia「大社」では

大社とは大きな神社、または平安時代初期の延喜式神名帳に大社として列格される 492 の神社、または大社と名乗る神社のこと。かつては単に大社といえば一般的には出雲大社のことを指した。

と書かれている。

Wikipedia「名神大社」では

名神大社とは、日本の律令制下において、名神祭の対象となる神々(名神)を祀る神社である。延喜式巻3の臨時祭の名神祭の条下(以下、名神祭式という)と、同巻9･10の神名式(延喜式神名帳)に掲示され、後者の記載に当たっては名神大と略記されている。

名神は神々の中で特に古来より霊験が著しいとされる神に対する称号で、続日本紀天平2年(730年)10月庚戌(29日)条の、渤海からの貢物を諸国の名神社に奉ったとあるのが文献上の初見である。弘仁12年(821年)正月4日付太政官符に、名神は「或は農の為に歳を祷り、或は旱の為に雨を祈る。災害を排すに至り荐(しきり)に徴応有り」とある。

ある神が名神と認められる条件は、官社(官幣社)に列し(神位を授けられ)、大社に昇格している必要がある。

名神祭は名神祭式に規定されるが、そこには対象とする神社名・座数・幣物の色目が記載されるのみなので、 その起源や詳しい儀式次第を知ることはできない。

三代格式とは弘仁格式・貞観格式・延喜格式をいう。弘仁式は701年(大宝元年)から819年(弘仁10年)までの式を編纂。一部現存。貞

観式は 871 年(貞観 13)完成。現存せず。

日本書紀の完成は養老四年 720 である。日本書紀と神社の格付けは、律令体制を補う意図をもっていたと思われる。

Wikipedia「延喜式」では

延喜式は、平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式の一つである。三代格式のうちほぼ完全な形で残っているのは延喜式だけであり、細かな事柄まで規定されているため、古代史研究のうえで重視されている。

延喜 5 年(905 年)、醍醐天皇の命により藤原時平らが編纂を始め、時平の死後は藤原忠平が編纂に当たった。弘仁式・貞観式とその後の式を取捨編集し、延長 5 年(927 年)に完成した。

Wikipedia「延喜式神名帳」では

現代において、延喜式に記載された神社と同一もしくはその後裔と推定される神社のことを論社・比定社などと呼ばれる。式内社の後裔としてほぼ確実視されている神社でも、確実な証拠はほとんど無く、伝承により後裔の可能性がきわめて高い論社という扱いである。

延喜式編纂時以降、社名や祭神・鎮座地などが変更されたり、他の神社に合祀されたり、また、荒廃した後に復興されたりした場合、式内社の後裔と目される神社が複数になることもある。

次の表 VI02 は Wikipedia「名神大社」の表から神階が三位以上を抜き出したものである。神社名は「名神大社」一覧表の社名を用いた。

これらの神社は、900 年頃に律令日本が、重要と認めた神社といえる。

以下は、Wikipedia の記事から抜き出したものである

律令の律は刑法、令はそれ以外（主に行政法。その他訴訟法や民事法も。）に相当する。律令国家の基本となる法典である。「格式」とは、律令の補完のために出された法令あるいはそれらをまとめた法令集のことを指す。格は律令の修正・補足のための法令（副法）と詔勅を指し、式は律令の施行細則を指した。

表 VI02 三位以上の名神大社の比定社

一品	伊弉諾神宮(淡路)	八幡大菩薩宇佐宮・比売神社		
二品	吉備津神社			
正一位	松尾大社	平野神社	賀茂別雷神社	賀茂御祖神社
	春日大社	大名持神社(吉野)	大神神社(桜井)	石上神宮
	枚岡神社	香取神宮	鹿島神宮	日吉大社
従一位	葛木御歳神社(御所)	高鴨神社(御所)	宗像神社(桜井)	大和神社(天理)
	住吉大社	廣田神社(西宮)	諏訪大社	氣比神宮
	気多大社(羽咋)	高良大社(久留米)		
正二位	月読神社(葛野)	多度大社	熱田神宮	南宮大社
	二荒山神社	若狭彦神社	熊野大社(松江)	出雲大社
	大山祇神社	宗像大社	阿蘇神社	
従二位	葛城一言主神社	高天彦神社(御所)	葛木坐火雷神社	恩智神社(八尾)
	武水別神社(千曲)	大物忌神社	月山神社	若狭姫神社
	熊野本宮大社			
正三位	平野神社	龍田大社	廣瀬大社	丹生川上神社(中社)
	金峯神社	多神社(田原本)	浅間大社	安房神社
	射水神社	宇倍神社(鳥取)	中山神社(津山)	
従三位	梅宮大社	伏見稲荷大社	大鳥大社(堺)	生田神社
	阿射加神社	三嶋大社	筑波山神社	御上神社
	兵主大社	一之宮貫前神社	伊達神社(和歌山)	志磨神社(和歌山)
	静火神社(和歌山)	伊曽乃神社(西条)	野間神社(今治)	伊予神社

Wikipedia「名神大社」には、各神社の項目の記事、六国史からの神階の授位の記事がある。

これらから東遷に関わる可能性が考えられる大阪府以西に所在する神階が 3 位以上の神社と一部の 4 位の神社に対して、六国史での初見年とその神階および最終神階を記したものが次の表 VI03 である。

六国史は維基文庫で収録されているが、現状では、これから引用することは不可能である。「名神大社」では所在地と六国史での最終神階は書かれている。ここから各神社の Wikipedia の項目にリンクされている。これより初見時のデータを得た。ここでは、最終神階とその受階年だけのものから、全ての昇階が書かれていると思われるものまでがある。

東遷の経路にあると思われる神社には ＊ を付けた。

700 年代初見の蘭に書かれた、()付きの神階は、初見時に昇階とある神社の昇階前の神階である。

受階年・昇階年は最初と最後のみを取り挙げた。表 VI03 で初見年は 749 年から 795 年で 76*年が多い。なお、日本書紀は 720 年に完成したとされており、聖武天皇 749 孝謙天皇 758 淳仁天皇 764 称徳天皇 770 と天皇が続く時代である。また、半分ほどの神社は初見年に昇階と書かれているから、初受階年は遡ることになる。ここで用いた初見年は適切ではない。正確には、六国史に初めて受階・昇階が書かれている年である。階位の高低は
倭王朝に対する重要度や祭神またはその子孫の貢献度を反映していると考えている。

表 VI03 神階の初見と最終神階(大阪以西)

社名(現在)	所在	700年代初見	800年代初見	六国史での最終神階 無記年はWikiによる
伊弉諾神宮*	淡路市	(無品勲八等)	859 一品勲八等	
宇佐神宮*	宇佐市	749 二品		857 一品
吉備津神社*	岡山市	(無位)	847 従四位下	859 二品
飛鳥戸神社	羽曳野市		859 正四位下	正四位下
恩智神社	八尾市		850 正三位	859 従二位勲六等
枚岡神社*	東大阪市	(従三位勲三等)	836 正三位勲三等	859 正一位勲三等
住吉大社*	住吉区	784 正三位勲三等		806 従一位
大鳥大社*	堺市	(従五位下)	842 従五位上	861 従三位勲八等
伊達神社*	和歌山	(従五位下)	844 正五位下	875 従三位
志磨神社*	和歌山	(従五位下)	844 正五位下	875 従三位
静火神社*	和歌山	(従五位下)	844 正五位下	875 従三位
廣田神社	西宮市		868 従一位	従一位勲八等
生田神社*	神戸市	(従五位下勲八等)	859 従四位下勲八等	859 従四位下勲八等
中山神社*	津山市	(正五位下)	860 従四位下	875 正三位
厳島神社	廿日市市	(正五位下)	859 従四位下	867 従四位上
住吉神社	下関市	(従五位下)	859 従五位上	891 正四位上
大麻比古神社	鳴門市	(従五位下)	859 従五位上	883 従四位上
忌部神社	吉野川市		849 従五位下	883 従四位下
田村神社	高松市		850 従五位下	887 正四位上
大山祇神社*	大三島	766 従四位下		875 正二位
伊曽乃神社*	西条市	766 従四位下		875 従三位
野間神社	今治市	766 従五位下		従三位
伊予神社*	伊予郡	766 従五位下		870 正四位上
宗像大社*	宗像市		840 従五位下	859 正二位
高良大社*	久留米市	795 従五位下		870 従一位
阿蘇神社	阿蘇市		823 従四位下勲五等	867 正二位勲五等

先ずは、表 VI03 を眺めて、目にとまったことを挙げていこう。

伊弉諾神宮(淡路島)・宇佐神宮・吉備津神社の 3 社が品位である。律令制では品位は親王・内親王に授与されるものである。神階においても同様と考える。伊弉諾は先祖であるから、品位は納得できる。吉備津神社は 850 年前後に、無位から従四位下をへて、二品となっている。宇佐神宮は 700 年代の初見から品位である。

九州北部には(少しはみ出るが)、住吉神社・宗像大社・宇佐神宮・高良大社の 4 社があり、神階の初出は、高良大社と宇佐神宮が 700 年代、他は 800 年代である。宗像大社を除く 3 社は、三国志の女王国の(版図に含まれるかどうかは判断できないが)周辺地域である。これらは、その先の攻略の為の補給基地ではなかったかと考える。

品位の宇佐神宮を除く、3 社の内で、久留米の高良神社が従一位で最高位となっている。表 VI03 の神社では枚岡神社の正一位に次ぐもので、葛木御歳神社・住吉大社と並ぶものである。また、表 VI04 で、春日大社と京都の神社を除いた中で、正一位は大名持神社・大神神社・石上神宮、表 VI05 では香取神宮・鹿島神宮・日吉大社のみである。

宇佐神宮は国東半島の付け根部分にある。東遷の兵站(補給基地)であったと考えている。次の図 VI02 には記入されていないが、国東

半島の鼻先に姫島があり、祝島を経て柳井市にいたる。現在の室津半島は、糸島と同様に、島となっている。圧倒的な水軍を前提とすれば、この島伝いのルートは、豊から安芸に至る最短ルートとなる。神武東征では、このルートを採らず、遠賀川河口部にあるとされている崗水門を経由している。

高良神社は本稿を書いている間に知った。さらにその神階が従一位と高いことに驚いた。地図を見れば、高良大社は小高い丘の上に建っている。表 VI03 の神社で、小高い丘の麓に建っている神社は多いが、丘の上に建っている神社は高良大社だけではないだろうか。これは兵站よりは南の敵に対する防御施設であったことを示すかもしれない。有明海を挟んだ対岸には、吉野ヶ里遺跡がある。景行天皇紀の 12 年から 19 年の記事では、熊襲の平定後、火国(肥国)を巡っている。北九州制圧後の侵攻先に肥国を加える必要がある。また、吉野ヶ里は倭の肥国に対する橋頭保なのか、肥国の倭に対する防御施設の可能性が考えられるが、現状では判断できない。久留米駅は鹿児島本線と九大本線の接続駅である。

神社は倭王朝にとって重要な施設(宮・兵站・豪族の館)ではなかったかと考えている。跡地、あるいは、日本書紀の時点でもその機能を

持っていたものなどが考えられる。神社には山(小高い丘)の麓に本宮があり、高所に奥宮を伴うものが多い。伊勢神宮の内宮と下宮もその名残といえるかもしれない。明日香の諸宮と高取城や朝倉氏の一条谷など、領主の居城も同様であろう。さらに、朝鮮式山城やヨーロッパでも同様の例が見られる。

次の図に表 VI02 に書かれている神社の位置を示す。

図 VI02 表 VI03 の神社（奈良を除く）

中山神社を除いて、沿海部に位置している。

芸予諸島については、神階の初出が、厳島神社は 800 年代で、他は 700 年代である。大洲は正二位と高階位の大山祇神社のある大三島の可能性が高いと考えている。

岡山(吉備)は神武東征で 3 年間留まった所である。中山神社のある岡山県北部は鉱物資源が豊富である。

大阪湾一帯の神社では、神階の初出は従一位の住吉大社のみ 700 年代で、他は 800 年代である。神武東征での難波之碕にある。正一位の枚岡神社は河内國草香邑青雲白肩之津に近い。

和歌山県の 3 社には竈山・名草邑が対応する。

神武東征の菟狭から吉備までの経路は

筑紫国 菟狭 → 筑紫國 崗水門 → 安藝國 埃宮 →吉備國 高嶋宮

であった。

表 VI03 で挙げられている神社で、この経路に近いものは、下の方の

厳島神社(従四位上)、住吉神社(正四位上)、大山祇神社(正二位)

伊曽乃神社(従三位)、伊予神社(正四位上)

である。ここで大山祇神社の正二位が目につく。表 VI03 で、これより神階の高いのは、大名持神社(正一位)、葛木御歳神社(従一位)、住吉大社(従一位)、 広田神社(従一位)、高良大社(従一位)である。

（奈良・京都には一位・二位の神社は多数存在する。）

ここで、次の疑問を設定しておく。

疑問 VI01 宇佐神宮と吉備津神社が品位なのは何故か。さらに、吉備津神社は初め品位ではなかった。これは、何を物語るのか。

ついでに、Wikipedia「名神大社」に挙げられている他の神社についても、3位以上ものを表にしておく。

表 VI04 神階の初見と最終神階(奈良・京都)

社名(現在)	所在	700年代	800年代	六国史での最終神階 無記年はWikiによる
春日大社	奈良市			正一位勲一等
龍田大社	三郷町		822 従五位下	859 正三位
廣瀬大社	河合町		822 従五位下	859 正三位
葛木御歳神社	御所市		852 従二位	859 従一位
葛城一言主神社	御所市		850 正三位	859 従二位勲二等
高天彦神社	御所市		806 正四位上	859 従二位勲二等
高鴨神社	御所市			従一位勲八等
葛木坐火雷神社*	葛城市		852 正三位	859 従二位勲二等
大名持神社*	吉野町		(従一位) 859 正一位勲二等	正一位
丹生川上神社	東吉野村		818 従五位下	877 正三位
金峯神社	吉野町			正三位勲八等
大神神社	桜井市		850 正三位	859 正一位勲二等
宗像神社	桜井市		880 官社	881 従一位勲八等
多坐弥志理都比古神社	田原本町			正三位勲八等
大和神社	天理市			従一位勲三等
石上神宮	天理市		850 正三位	868 正一位勲六等
月読神社	京都市		859 正二位	正二位
松尾大社	京都市	784 従五位下		881 正一位勲二等
平野神社	京都市	782 従四位上		864 正一位
梅宮大社	京都市		836 従五位上	875 従三位
賀茂別雷神社	京都市			807 正一位勲一等
賀茂御祖神社	京都市			807 正一位勲一等
伏見稲荷大社	京都市			従三位

表 VI05 神階の初見と最終神階(その他)

社名(現在)	所在	700年代	800年代	六国史での最終神階 無記年はWikiによる
阿射加神社	松阪市		835 従五位下	866 従三位
多度大社	桑名市			863 正二位
熱田神宮	名古屋市		822 従四位下	852 正二位
富士山本宮浅間大社	富士宮市		853 従三位	正三位
三嶋大社	三島市		850 従三位	868 従三位
安房神社	館山市		836 従五位下	859 正三位勲八等
香取神宮	香取市	777 正四位上		882 正一位勲一等
鹿島神宮	鹿嶋市	777 正三位		850 正一位(勲一等)
筑波山神社	つくば市		823 従五位下	871 従三位
日吉大社	大津市			正一位
御上神社	野洲市	(従五位下)	859 従五位下	875 従三位
兵主大社	野洲市			従三位勲八等
南宮大社	垂井町	(無位)	836 従五位下	873 正二位
諏訪大社	長野県	(無位)	842 従五位下	867 従一位勲八等
武水別神社	千曲市	(無位)	866 従二位	866 従二位
一之宮貫前神社	富岡市	(無位)	839 従五位下	880 従三位勲七等
二荒山神社	宇都宮市	(従五位上)	836 正五位下勲四等	869 正二位勲四等
大物忌神社	遊佐町	(従五位上)	838 正五位下勲五等	880 従二位勲三等
月山神社	庄内町	(正四位上勲六等)	864 従三位	880 従二位勲四等
若狭彦神社	小浜市	(従二位勲八等)		859 正二位勲八等
氣比神宮	敦賀市	731 従三位		859 従一位勲一等
気多大社	羽咋市	784 正三位		859 従一位勲一等
射水神社	高岡市	780 正五位下		859 正三位
宇倍神社	鳥取市		848 従五位下	878 正三位
熊野大社	松江市		851 従三位	867 正二位勲七等
出雲大社	出雲市			867 正二位勲八等
熊野本宮大社	田辺市			従二位

13.3. 各神社概要

表 VI03 の各神社について調べていく。方法は Wikipedia「名人大社」の社名欄の社名をクリックすると、祖の神社の Wikipedia のページにジャンプする。ここから、祭神と神階と興味ある記事を拾い集める。なお、神階に関しては、表 VI03 に初出と六国史の最後である日本三代実録までの最終神階が書かれているため、原則として省略する。各項目は各々の神社が編集したものと思われる。なお、殆どが引用の為、太字にはしないでおく。

伊弉諾神宮

祭神は伊弉諾尊・伊弉冉尊

文献では、日本書紀履中天皇 5 年条 9 月条において島に居る伊奘諾神の記載や、允恭天皇 14 年 9 月条に島神の記載があり、これらは一般に当社に比定される。

松前健は、地方神であった伊弉諾尊の神話が、淡路国から大和朝廷の神話に組み込まれたとする。松前によれば、伊弉諾尊を皇祖神の親とする信仰が宮廷に古くからあったとは思えず、2 神が組み込まれたのは 7 世紀中頃以降で、大嘗祭卯の日の神事に召された淡路出身者

や、宮廷に食料を運んだ淡路の海人が伝えたとする。また、日本三代実録で当社が無品勲八等から一品の極位へ一足飛びに神位を進めるのは、この時期に正式に皇祖神の最近親者とされたため、とする。

宇佐神宮

一之御殿：八幡大神（誉田別尊(応神天皇)）

二之御殿：比売大神（宗像三女神(多岐津姫命・市杵島姫命・多紀理姫命)）

三之御殿：神功皇后（息長足姫命）

主神は、一之御殿に祀られている八幡大神の応神天皇であるが、ただ実際に宇佐神宮の本殿で主神の位置である中央に配置されているのは比売大神であり、なぜそうなっているのかは謎とされている。

八幡宇佐宮託宣集には、筥崎宮の神託を引いて、「我か宇佐宮より穂浪大分宮は我本宮なり」とあり、筑前国穂波郡（現在の福岡県飯塚市）の大分八幡宮が宇佐神宮の本宮であり、筥崎宮の元宮であるとある。

和銅 5 年 712 には官幣社となり、社殿は、宇佐亀山に神亀 2 年 725 に一之殿が造営された。以後、天平元年 729 に二之殿、弘仁 14 年 823

に三之殿が造営されて現在の形式の本殿が完成したと伝えられている。

比売神社も、天平勝宝元年749に二品、天安元年857年に一品に叙されている。

摂社のうち、境内社の社名と祭神は、

若宮神社：若宮五神、住吉神社：住吉三神、黒男神社：武内宿禰、春宮神社：菟道稚郎子命、宇佐祖神社：菟沙津彦・菟沙津姫

Wikipedia「大分八幡宮」からは、大分八幡宮は、福岡県飯塚市にある神社。旧社格は郷社。筥崎宮の元宮として知られる。祭神は、応神天皇・神功皇后・玉依姫命。

Wikipedia「大分八幡宮」からは、祭神は応神天皇、配祀神は神功皇后と玉依姫命

飯塚市にある大分八幡宮が、本宮で筥崎宮の元宮というのは興味深い。一応は、応神天皇を祭神としていることから、品位が与えられたとしておこう。

飯塚市は投馬国の候補地としたところである。また、倭王は

伊都国 → 投馬国 → 三国志の邪馬臺国(筑後川―山国川)

→（菊池川―大野川）→ 東遷

と移ったと考えている。上は全て邪馬臺国であったといえる。

吉備津神社

主祭神：大吉備津彦命

第７代孝霊天皇の第三皇子で、元の名を彦五十狭芹彦命。崇神天皇 10 年、四道将軍の１人として山陽道に派遣され、弟の若日子建吉備津彦命と吉備を平定した。その子孫が吉備の国造となり、古代豪族の吉備臣になったとされる。

相殿神：御友別命（子孫）、　仲彦命(子孫)

千々速比売命（姉）、倭迹迹日百襲姫命（姉）

日子刺肩別命（兄）、倭迹迹日稚屋媛命（妹）

彦寤間命（弟）、　若日子建吉備津日子命（弟）

社伝によれば、祭神の大吉備津彦命は吉備中山の麓の茅葺宮に住み、281 歳で亡くなって山頂に葬られた。5 代目の子孫の加夜臣奈留美命が茅葺宮に社殿を造営し、命を祀ったのが創建とする説もある。また、吉備国に行幸した仁徳天皇が、大吉備津彦命の業績を称えて 5 つの社殿と 72 の末社を創建したという説もある。

ここに書かれた次の神階の昇階暦は興味深い。

847 年 無位から従四位下　　848 年 従四位上

852 年 四品、官社　　857 年 四品から三品

859 年 三品から二品　　(940 年 一品)

この間の天皇は、54 代仁明天皇 833-850、55 代文徳天皇 850-898、60 代醍醐天皇 897-930 である。

これも、祭神が皇子であることから、品位となったとしておく。それだけならば、初めから品位となったはずである。上記期間における政治の状況に依るものと考える。

表 VI03 で、品位の 3 社のうち、始めから品位であったのは、宇佐神宮のみで、他は 859 年に品位となった。

大名持神社

祭神は、大名持御魂神・須勢理比咩命・少名彦名命

吉野町河原屋にあり、旧伊勢街道・旧東熊野街道の分岐点付近、独立峰の妹山山麓に鎮座する。

葛木御歳神社

主祭神：御歳神

相殿神：大年神（御歳神の父神）、　高照姫命

葛城一言主神社

祭神は、　葛城之一言主大神（主神）、幼武尊（雄略天皇）

延喜式神名帳での祭神は１座で、同帳に葛木坐一言主神社と見えるように元々は一言主神１柱を祀った神社とされる。一言主神に関しては、日本書紀・古事記における雄略天皇との対面説話が知られる。

葛木坐火雷神社

主祭神：火雷大神と天香山命、

配祀神：大日霊貴尊・高皇産霊尊・天津彦火瓊瓊杵尊・

伊古比都幣命

通称笛吹神社.

葛木坐火雷神社の元々の祭神は火雷大神で、天香山命は笛吹神社の祭神で、笛吹連の祖神である。火雷大神は、雷神とも言われるが、ここでは火の神として信仰されている。火雷神と同神である。

明治７年、笛吹神社の末社であった火雷社を笛吹神社に合祀し、社

名を葛木坐火雷神社に改め、郷社に列格した。

枚岡神社

祭神は、主神：天児屋根命（中臣氏祖神）

配神：比売御神 － 天児屋根命の妻神

経津主命 － 香取神宮祭神

武甕槌命 － 鹿島神宮祭神

神階について、承和 3 年 836 は従三位勲三等から正三位勲三等とあり、836 年以前に受階か。

所在地の東大阪市出雲井町は日下町(草香邑)の隣町(隣の隣)である。中臣氏の祖の天児屋根命を主祭神とする中臣氏の氏神として知られる。和名抄に見える地名のうちでは当地は河内国河内郡の豊浦郷に比定されるが、隣郡の河内国讃良郡には枚岡郷(異本は牧岡郷)があり、同地を枚岡神社の始源地とする説がある。

住吉大社

祭神は、第一本宮：底筒男命、第二本宮：中筒男命

第三本宮：表筒男命、第四本宮：神功皇后

大阪市南部、上町台地基部西端において大阪湾の方角に西面して鎮座する。海の神である筒男三神と神功皇后を祭神とし、古くは古墳時代から外交上の要港の住吉津・難波津と関係して、航海の神・港の神として祀られた神社である。

住吉大社については、海上交通の守護神とする信仰が最もよく知られる。この信仰については、住吉大社神代記にあるように住吉三神は筑紫大神であり、元々は筑前の那の津（現博多湾）の地主神・守護神であったのを、三韓征伐後に分祀し、荒魂を長門の住吉神社に、和魂を当社に祀ったものであったが、難波の発展に伴ってヤマト王権の外港の守護神に発展したと考える説がある。

神功皇后紀の伝説的記事を別とすると、確かな史料のうえでの文献上初見は日本書紀朱鳥元年条 686 で、紀伊国国懸神・飛鳥四社・住吉大神に弊が奉られたという記事になる。

大鳥大社

祭神は、日本武尊・大鳥連祖神

元来の祭神は大鳥連の祖神であるらしかったが、一時期天照大神が祭神とされるようになった。その後、日本武尊が祭神と考えられるようになり、これが定着した。

大鳥連は中臣氏と同じく天児屋命を祖神としていたので、大鳥連祖神は天児屋命ということになる。

各神の祭祀については、大鳥氏が単に一宮の神官であったというには、後世の倭武伝説を差し引いたにしても、その変遷ぶりには謎めいた部分も残っており、大鳥連の、領主あるいは神官という職業以外の何らかの役割を古代豪族社会で担った可能性も含め、今後も検証が必要と思われる。延喜式神名帳記載の名神大社であり、とくに防災雨祈の祈願社として知られた。本殿は大鳥造といい、切妻造・妻入社殿という出雲大社造に次ぐ古形式を保っている。

元来の祭神は大鳥連の祖神であるらしかったが、一時期天照大神が祭神とされるようになった。和泉国大鳥五社大明神并府中惣社八幡宮縁起によると本地仏は釈迦如来となっている。その後、日本武尊が祭神と考えられるようになり、これが定着した。これは大鳥神社の大鳥という名称と日本武尊の魂が白鳥となって飛び立ったという神話が結び付けられたために起こった習合であると考えられる。以来、長い間にわたって日本武尊を祭神としてきたが、明治 29 年に政府の祭神考証の結果を受け内務省の指示により、大鳥連祖神に祭神を変更した。その後、昭和 36 年に大鳥連祖神にくわえて、日本武尊を祀った。

伊達神社

祭神は、五十猛命（素盞嗚尊の御子神、元々の祭神）

神八井耳命（のちに併祀）

かつては五十猛命の父神・素盞嗚尊が祇園牛頭天王として祀られていたという。

志磨神社

祭神は、主祭神：中津島姫命（別名を市杵島姫命）

配祀神：生国魂神

文献上の志磨神社はその後所在不明となっていたが、元和年間1615-162 に、当時、九頭(国津)明神と称していた当社に比定された。

静火神社

祭神は、 静火大神

社家の鵜飼氏の文書によれば、祭神は火結神とされていた。南紀徳川史によると享保 8 年 1723 頃までには廃絶しており、同年に和歌山藩によって薬師山(前山・天霧山；現社地)に社殿が再建され、竈山神社が管理したという。

伊達神社（和歌山市園部）、志磨神社(和歌山市中之島)、静火神社(和歌山市和田、竈山神社摂社)とともに紀三所社と称される。紀伊続風土記では紀三所社が伊太祁曽三神（五十猛命・大屋都比売命・都麻都比売命）を分祀するとする。また、住吉大社神代記では、住吉大社摂社の船玉神社が紀氏の神であり志麻神・静火神・伊達神の本社であるとしている。

廣田神社

祭神は、主祭神：天照大神荒魂(撞賢木厳之御魂天疎向津媛命)

伊勢神宮内宮の第一別宮荒祭宮祭神と同体

脇殿神：住吉大神、八幡大神、武御名方大神、高皇産霊神

当初は甲山山麓の高隈原に鎮座し、後に御手洗川のほとりに遷座したが、水害のため享保 9 年 1724 に江戸幕府将軍の徳川吉宗により廣田山の地に遷座した。

生田神社

祭神は、 稚日女尊 － 天照大神の幼名とも妹とも和魂であるともいわれている

201 年に神功皇后の三韓外征の帰途、神戸港で船が進まなくなった為神占を行ったところ、稚日女尊が現れ、吾は活田長峡国に居らむと海上五十狭茅に命じて生田の地に祭らしめ、との神託があったと日本書紀に記されている。

当初は、現在の新神戸駅の奥にある布引山(砂山)に祀られていた。799 年(延暦 18 年)4 月 9 日の大洪水により砂山の麓が崩れ、山全体が崩壊するおそれがあったため、村人の刀祢七太夫が祠から御神体を持ち帰り、その 8 日後に現在地にある生田の森に移転したといわれている。

中山神社

祭神は、主祭神：鏡作神

相殿神：天糠戸神、石凝姥神

延喜式頭注には大己貴命、作陽誌には吉備武彦命、大日本史や神祇志料には吉備津彦命と記されている。他に金山彦命とする説もある。今昔物語集や宇治拾遺物語では、当社の祭神は猿神であるとされている

厳島神社

祭神は、　市杵島姫命、　田心姫命、　湍津姫命

3 柱は宗像三女神と総称される

古くは伊都岐島神社とも記された。社伝では、推古天皇元年 593、当地方の有力豪族・佐伯鞍職が社殿造営の神託を受け、勅許を得て御笠浜に市杵島姫命を祀る社殿を創建したことに始まるとされる。

住吉神社

祭神　第一殿：住吉三神（表筒男命・中筒男命・底筒男命）

第二殿：応神天皇、　第三殿：武内宿禰命

第四殿：神功皇后、　第五殿：建御名方命

大阪の住吉大社が住吉三神の和魂を祀るのに対し、当社は荒魂を祀るとされる。日本書紀・神功皇后摂政前紀によれば、三韓征伐の帰途、大神が、我が荒魂を穴門(長門)の山田邑に祀れ、と再び神託があり、穴門直践立を神主の長として、その場所に祠を建てたのを起源とする。

大山祇神社

祭神は、　大山積神

別名として和多志大神とも、三島大明神とも。伊弉諾尊と伊弉冉尊

の間の子で、磐長姫命と木花開耶姫命(瓊瓊杵尊の妃)の父。

仁徳天皇年代、百済より摂津国御島に大山祇神を祀るという(伊予国風土記逸文)。推古天皇 2 年 594、大三島瀬戸(遠土宮、現 横殿社。今治市上浦町瀬戸)に移るという (伊予国風土記逸文、三島宮社記)。大宝元年 701、現在地'今治市大三島町宮浦)への遷宮に向け造営が始まる(三島宮御鎮座本縁)。

伊曽乃神社

祭神は、 天照大神の荒魂、武国凝別命

2 柱をして伊曽乃神と総称する。

社伝によれば、成務天皇 7 年に伊予御村別の祖の武国凝別命(景行天皇の皇子)が東予地方を開拓するにあたり、皇祖神である天照大神を祀ったことに始まるという。

伊予神社

伊予神社(松前町)

主祭神: 彦狭島命

配神: 愛比売命、 伊予津彦命、 伊予津姫命、

日本根子彦太瓊命、 細姫命、 速後上命

伊予神社(伊予市)

祭神：月読尊、　愛比売命

共に、河野氏の系譜を記した予章記には孝霊天皇の皇子の彦狭島命が反抗する民を制圧するために伊予国に派遣されたとあり、続けて皇子が現社地にあたる神崎庄に鎮座し、このことから当社を親王宮と呼ぶと記している。

宗像大社

祭神：3社にそれぞれ以下の神を祀り、宗像三女神と総称する。

沖津宮：田心姫神、　中津宮：湍津姫神、　辺津宮：市杵島姫神

沖津宮のある海上交通の要所に位置する沖ノ島は、古来より島に立ち入り見聞きした事を口外してはならず、島全体が御神体である。昭和29年以来十数年に渡り沖ノ島の発掘調査が行われ、4世紀から9世紀までの古代祭祀遺構や装飾品などの大量の祭祀遺物(奉献品)、この他に縄文時代から弥生時代にかけての石器や土器などの遺物が発見された。(海の正倉院)

高良大社

正殿：高良玉垂命　　左殿：八幡大神　　右殿：住吉大神

この他、本殿内には御客座があり、豊比咩大神が合祀されている。

高良玉垂命は朝廷から正一位を賜っているものの記紀には登場しておらず、正体が誰であるかに関しては古くから論争がある。

14. 古墳と土器のおさらいなど

序

古墳に関しては、今まで全く触れないできた。正確には、触れられなかった。前方後円墳は、近畿(奈良県)で出来たものが、ヤマト王権の拡張とともに拡がっていったという通説に基づいた文献が殆どである。これと、本稿の作業仮説 I14: 倭の東遷は五王時代に行われた、との関係をどうするのかが定まっていない。通説は、近畿地方にあった倭(ヤマト)王権の拡大とともに拡がったということと考える。本稿の立場から、現在抱いている大まかなイメージは、東遷の過程で造られ始められたと想っている。古墳に関しては、〇〇遺跡調査報告書は膨大なものが報告されている。これらは素人が簡単に読めるものではない。

天皇陵は崩御した宮の近くに造られた、という観点からは、応神天皇から継体天皇までの天皇陵の記事の検討から着手しようかと考えている。

時代が下がるが、南北朝は皇位争いから戦争になった例である。結

果は、南朝は過去の王権を、北朝は今後の王権を得ることとなった。

継体天皇は応神天皇の 5 世の孫となっている。この時も南北朝と同じことが起きたのではないかとも考えられる。

この他に、参考となると思われる項目を挙げておく。

☆　平氏の退路は、東遷の経路とは逆となるが、何か参考になるのかもしれない。

☆　日本列島を征服した例としては、信長・秀吉(・家康)が挙げられる。

☆　五畿七道が、恐らく律令時代に、制定された。

☆　律令制以前に大宰あるいは総領と呼ばれた官職があった。

☆　前方後円墳の終焉と伊勢神宮

14.1. 畿内の古墳

本章の序で、前方後円墳は倭王朝独特のものである、と述べた。また、天皇陵は崩御した宮の近くに造られた、とも述べた。

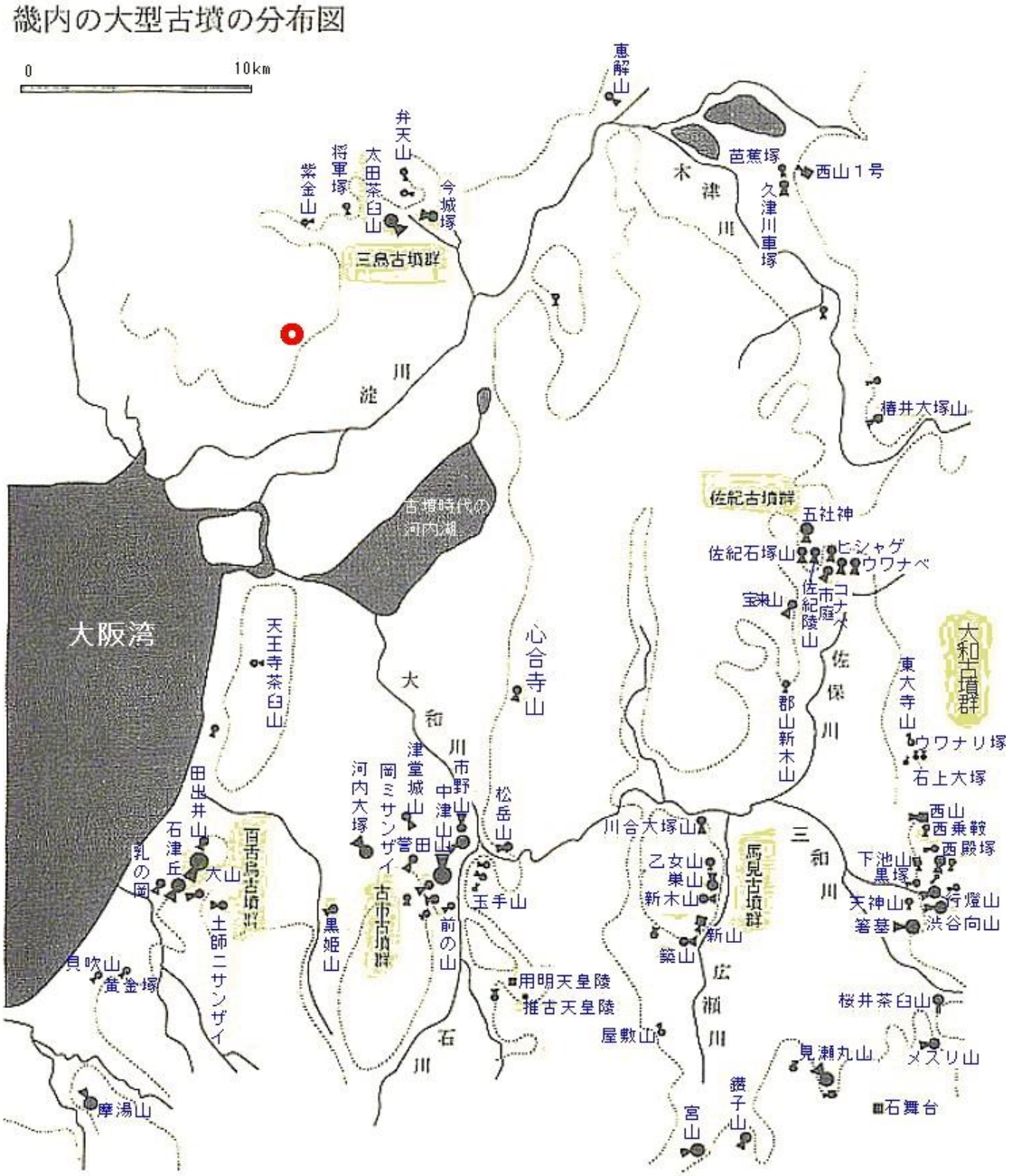
Wikipedia「日本の大規模古墳一覧」では巨大さを墳丘長で比較し、その長さが 200m以上のもの 34 基を順に一覧している。これを眺めると、近畿地方(大和・河内)以外のものは、4 位の造山古墳(吉備、岡山市)、9 位の作山古墳(吉備、総社市)、26 位の太田天神山古墳(群馬県太田市)である。

図 VI04 は畿内の大型古墳の分布図である

この図は、「新・古市古墳群を行く」から得た。このページは「邪馬台国大研究」→「歴史倶楽部」に属し、大阪本町歴史倶楽部の例会の記録である。

この図から思いつくことを挙げていく。

- 河内湖は図 V03 より少し小さくなっているようだ。
- 奈良湖が描かれていない。



- 宇治川と木津川の間が水面になっている。古代では、巨椋池はかなり大きかったようである。
- 橿原神宮はこの図で見瀬丸山古墳の少し左上である。

▫ 殆どが前方後円墳である。用明天皇陵が方墳。

▫ 右上にある恵解山古墳は京都府長岡京市勝竜寺 30

▫ 弁天山古墳は大阪府高槻市南平台 3 丁目で名神高速と府道 115 号線の交わる辺り。

▫ 黒姫山古墳は大阪府堺市美原区黒山 529 で、左の川は西除川で、現在は大阪市立大学の近く(浅香中央公園)で大和川に合流している。美原 JCT の近く。

▫ 川合大塚山古墳の左の大和川が半円状になっている所が王子で、斑鳩はこの上である。

▫ 図 VI03 と図 V03 では河内湖の形状が少し異なる。また、図 VI03 には奈良湖が描かれていない。

▫ 木津川の上の黒い部分は巨椋池であろう。

図 VI03 に書かれている古墳群について Wikipedia の各項目から、抜き出していく。

Wikipedia「**百舌鳥古墳群**」

百舌鳥古墳群は、大阪府堺市にある世界遺産の古墳群。半壊状態のものも含めて 44 基の古墳がある。このうち 19 基が国の史跡に指定

されているほか、これとは別に宮内庁によって3基が天皇陵に、2基が陵墓参考地に、18 基が陵墓陪冢に治定されている。かつては 100 基を上回る古墳があった。

堺市北西部に位置し、古代の海岸線に近い上町台地に続く台地上に築かれている。古墳は東西、南北ともそれぞれ約4キロメートルの範囲に分布。 古墳は、前方部が南向きに築造されている上石津ミサンザイ古墳、大山古墳、田出井山古墳などと百済川の谷の両岸に築造された土師ニサンザイ古墳、いたすけ古墳、百舌鳥御廟山古墳の二つの古墳群から構成されている。

この台地の西側の低い背梁部に上石津ミサンザイ古墳が営まれ、その北方へ大山古墳、田出井山古墳などが順次築造されていく一方、百済川の東方へも既述した古墳群が拡大されていったと推測される。

Wikipedia「古市古墳群」

古市古墳群は、大阪府羽曳野市・藤井寺市にある古墳群。20 基が国の史跡に指定され、27基(重複含む)が宮内庁により天皇陵(8基)・皇后陵(2基)・皇族墓(1基)・陵墓参考地(1基)・陵墓陪冢(15基)に治定されている。

東西約 2.5 キロ、南北 4 キロの範囲内に、墳丘長 200 メートル以

上の大型前方後円墳 6 基を含む、123 基(現存 87 基)の古墳で構成される古墳群である。いずれも標高 24 メートル以上の台地や丘陵上にある。北部の誉田御廟山古墳(伝応神陵)・仲津山古墳(伝仲津姫陵)・市ノ山古墳(伝允恭陵)・岡ミサンザイ古墳(伝仲哀陵)などの古い古墳群と南方の前ノ山古墳(白鳥陵)を中心とする前方部の著しく発達した西向きの新しい一群とに分けられる。

古墳造営には豪族の土師氏などが関与していたと考えられている。

Wikipedia「三島古墳群」

三島古墳群(三島野古墳群)とは、淀川北岸、桧尾川流域から茨木川流域にあり、大阪府高槻市と茨木市(旧三島郡)にかけて広がる古墳と遺跡の総称。

古墳だけでも大小 500 基以上を数える。古代三島地方の中心地であったこの地には、古墳時代初期から終末期までの各時代を代表する古墳が含まれる。

Wikipedia「大和古墳群」

大和古墳群は、奈良県天理市南部の萱生町から中山町に所在する古墳群。一部が国の史跡に指定されている。

Wikipedia「柳本古墳群」

柳本古墳群は、天理市柳本町に所在する古墳時代前期の古墳群である。

Wikipedia「纒向古墳群」

纒向古墳群は、奈良県桜井市に所在する古墳時代前期初頭の古墳群である。三輪山の西麓に広がる。前方後円墳発祥の地とみられている。箸墓古墳(箸中山古墳)は、定型化した最初の前方後円墳とみなされており、3世紀の後半から4世紀に築造されたと推定される。

Wikipedia「馬見古墳群」

馬見古墳群は奈良盆地西南部、奈良県北葛城郡河合町、広陵町から大和高田市にかけて広がる馬見丘陵とその周辺に築かれ、北群、中郡、南群の3群からなる。

Wikipedia「佐紀盾列古墳群」

佐紀盾列古墳群は、奈良市北西部、奈良丘陵の南西斜面の佐保川西岸・佐紀の地に所在する。

Wikipedia「茶臼山古墳」では、日本の古墳の名称。前方後円墳の型が茶臼に見えることから名付けられた。各地に同名の古墳があるため字名などをつけて呼称する、と書かれ、以下の古墳が挙げられている。

羽生田茶臼山古墳（栃木県壬生町）　赤堀茶臼山古墳（群馬県伊勢崎市）

別所茶臼山古墳（群馬県太田市）　膳所茶臼山古墳（滋賀県大津市）

木の岡茶臼山古墳（滋賀県大津市）

小幡茶臼山古墳（愛知県名古屋市）　茶臼山古墳（愛知県犬山市）

天王寺茶臼山古墳（大阪府大阪市）　太田茶臼山古墳（大阪府茨木市）

池田茶臼山古墳（大阪府池田市）

桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市）　茶臼山古墳（奈良県大和高田市）

浦間茶臼山古墳（岡山県岡山市）　中山茶臼山古墳（岡山県岡山市）

和田茶臼山古墳（岡山県赤磐市）

富田茶臼山古墳（香川県さぬき市）　高松茶臼山古墳（香川県高松市）

柳井茶臼山古墳（山口県柳井市）

Wikipedia「浦間茶臼山古墳」では、

奈良県桜井市の箸墓古墳、京都府木津川市の椿井大塚山古墳、奈良県天理市の黒塚古墳などとともに出現期古墳と総称される。なお、浦間茶臼山古墳、黒塚古墳、椿井大塚山古墳は箸墓古墳のちょうど2分の1に企画された前方後円墳である可能性が高いと考えられている。

Wikipedia「箸墓古墳」では、

築造年代は、墳丘周辺の周壕から出土した土器(土師器)の考古学的年代決定論と、土器に付着した炭化物による炭素14年代測定法により、邪馬台国の卑弥呼の没年(248年から遠くない頃)に近い3世紀中頃から後半とする説がある。一方で、近年炭素14年代測定法では、実年代より50-100年程度古く推定されることが明らかとなっていることや、古墳の規模および様式が魏志倭人伝の記述と異なっていることなどを理由に、4世紀中期以降とする説もある。

1968年(昭和43年)に近藤義郎が、古い段階の前方後円墳は前方部が途中から撥型に大きく開くことを指摘し、この墳形を呈する箸墓古墳も古い古墳であると考えられるようになった。測量図の等高線の様子から前方部正面が現状より拡がっていたことが分かる。前方部の先が撥型に開いている他の古墳は、兵庫県竜野市の養久山1号墳、同県の権現山51号墳、京都府木津川市の椿井大塚山古墳、岡山

県岡山市の浦間茶臼山古墳などがある。

2018年(平成30年)4月、奈良県立橿原考古学研究所が前方部出土の壺形土器と壺形埴輪26点、後円部頂上から出土した葬送儀礼用の土器の破片54点を調査した結果、前方部の土器は地元の土であるのに対し、後円部は吉備地方の土の特徴と酷似していることが分かった。このことから吉備地方で製造された完成品を後円部に並べたこと、吉備地方の勢力が大きな力を持っており、箸墓古墳の造営に重要な役割を果たしたことが推測される。

と書かれている。

14.2. 古墳のおさらい

今まで述べてきた本稿の立場からは、古墳に関する文献を引用するには、大和朝廷に関する部分を吟味することが必要となる。古墳に関する文献を読むにはそれなり、それなりの知識が必要となる。

これは、調べだすと大変だから、さらりと見ていく。本稿の作業仮説に矛盾する記事は引用しないなど、選択的引用となる。

全般

Wikipedia「前方後円墳」

前方後円墳は、古墳の形式の１つ。円形の主丘に方形の突出部が接続する形式で、双丘の鍵穴形をなす。日本の諸地域(およびそれに影響を受けた朝鮮半島南部)でのみ見られる前方後円墳の起源については、これまでに様々な仮説が唱えられている。

日本列島に広く分布し、その数は約4,800基、あるいは約5,200基ともいわれる。前方後円墳の存在が明確でないのは、北方では北海道・青森県・秋田県、南方では沖縄県の計４道県にすぎない。建造時

期や個数には幅があるものの、他の 43 の都府県では数百基から 1、2 基の前方後円墳が知られており、そのうち最多は千葉県の約 720 基。離島の対馬、壱岐、隠岐などにも存在する一方で、これまでのところ淡路では存在が確認されていない。各地域で最後に建造された前方後円墳はその時期にほとんど差がないことが判明している。5 世紀を最後に建造が途絶えた徳島県などは数少ない例外である。日本列島以外では、朝鮮半島西南部において栄山江流域を中心に前方後円形の古墳 10 数基の分布が知られる。

（起源に関して）最もよく知られているものは、弥生時代の墳墓から独自に発展したものであるという学説である。この説においては従来より存在した円形墳丘墓の周濠を掘り残した陸橋部分（通路部分）で祭祀などが行われ、その後この部分が墓（死の世界）と人間界を繋ぐ陸橋として大型化し円墳と一体化したと考えられる。それに対して、各地方政権の墳墓の糾合によるという説もある。例えば形は播磨の前方後円型墳墓から、葺石は古代出雲政権の四隅突出型墳丘墓から、というように、弥生時代に作られていた各地方政権の墳墓の諸要素を糾合して、大和政権が前方後円墳を考案したという。

Wikipedia「前方後方墳」

前方後方墳は、古墳の墳形の一種であり、特に東日本の前期古墳に多く存在する。また、中国・四国地方にも多く存在し、中でも出雲地方の前方後方墳は古墳時代を通じて築かれていた。その起源は、方形の墳丘墓への通路が変化し、突出部へと代わっていき成立したと推測されている。東日本の出現期古墳の多くは、前方後方墳であることが分かってきた。

現在全国で確認されている前方後方墳は、約二百数十基である。現在知られている前方後方墳の規模分布を調べてみると墳丘の長さが70メートル以上は34基あり、60～70メートルは33基、50～60メートルは48基、以下規模が縮小するとともに数が増加していく。70メートルを超える前方後方墳の旧国別の築造数は、出雲・美作・播磨・摂津・伊勢・尾張・三河・能登・常陸が各1基、美濃・駿河・越中・上野・出羽が各2基、山城・陸奥が各3基、下野が4基、大和が5基であり、大規模前方後方墳も大和に集中しているといえる。さらに、100メートルを超える前方後方墳5基が大和に集中している。また、日本最長の前方後方墳は、天理市の西山古墳(180 メートル、古墳時代前期)である。なお、前方後方形の基壇の上に前方後円形が乗るという非常に特異な形をしている。

Wikipedia「装飾古墳」

装飾古墳は、日本の古墳のうち、内部の壁や石棺に浮き彫り、線刻、彩色などの装飾のあるものの総称で、墳丘を持たない横穴墓も含まれる。大半が九州地方、特に福岡県、熊本県に集中している。福岡県桂川町の王塚古墳(国の特別史跡)、熊本県山鹿市のチブサン古墳などが有名である。

装飾古墳は、日本全国に約600基があり、その半数以上に当たる約340基が九州地方に、約100基が関東地方に、約50基が山陰地方に、約40基が近畿地方に、約40基が東北地方にあり、その他は7県に点在している。

古墳時代初期から装飾が施されていた。初期には刳抜式石棺の側面や蓋の上に、中期には組み合わせ式長持ち石棺の蓋の上面、家形石棺の蓋および棺の内側や外側、箱形石棺にも、そして、5世紀前半頃には横穴式石室にも彫刻や彩色の方法で装飾が施され、さらには石室内全体にまで及んだ。

装飾方法は、浮き彫り、線刻、彩色の3手法があり、浮き彫りや線刻に彩色するなどの併用手法を用いている。最初期の装飾手法は、彫刻が主流であり、線刻は一部で用いられ、浮き彫りが多く、彩色は赤

色顔料だけである。5世紀ごろになると彫刻されたものに赤色以外の色が使用されるようになる。6世紀になると浮き彫りを基調とする彫刻がなくなり、基本的には彩色だけで文様が描かれるようになり、石室の壁全体に図柄が描かれるようになる。

7世紀末から8世紀初めの奈良県高松塚古墳やキトラ古墳は、装飾古墳とは系統を異にするもので壁画古墳と呼び分けている。

装飾古墳と壁画古墳は製作の技法に依るものとはいえないか。後の、石窟や摩崖仏と関連があるのではないかと想っている。

Wikipedia「円墳」

円墳は、古墳の墳丘形式の一種であり、平面が円形の古墳をいう。

古墳時代を通じてつくられ、直径数メートルから百メートル前後で、規模は中・小型のものが多い。

墳形が単純なので、時期による形態の変遷は明確でない。墳頂部に墓壙を掘る前・中期のものは墳頂部の平坦面が広いものが多く、後期には土饅頭系が増え、横穴式石室をもつ後期や終末期のものでは墳頂平坦面が狭く、墳高がやや高い傾向にある。

なお、円墳に造出を付けたものを帆立貝形古墳と呼ぶ。前方後円墳

の前方部が小さいものと解されることもあるが、造出の規模の小さいものは円墳に分類することが多い。

最大の円墳は埼玉古墳群中にある丸墓山古墳(墳径 105m)とされてきた。しかし奈良県奈良市にある円墳の富雄丸山古墳を市教育委員会が 2017 年(平成 29 年)に測量調査した結果、従来直径 86m とされていたこの古墳が直径 110m 前後に復元できることが判明した。そうなれば富雄丸山古墳が丸墓山古墳を抜いて最大の円墳となる。

Wikipedia「方墳」

方墳とは墳丘の平面形が方形になる古墳のことで、古墳時代の全期間にわたって円墳についで数多く築かれている。

古墳時代初頭ないし前期に築かれるものは、弥生時代の大和風の方形周溝墓や出雲風の四隅突出型墳丘墓の延長と考えられ、性格自体もほとんど変わらないとみなされているが、最近は、前方後円墳や土師器出現の時期を画期として、方墳の一種とみなされている。そのため「前期群集墳」という造語まで発生している。弥生時代の四隅突出型墳丘墓は、すでに古墳時代に作られる技術が多様に用いられていることから、古代出雲の技術を物語る。

前期方墳の代表例は、島根県安来市の大成古墳、造山古墳(1 辺 60m)

が全国最大の規模を誇る。方墳は出雲に集中しており、前方後方墳の魁もみられる。比較的小型のものが多いが、前方後円墳の築造が停止する７世紀には有力者の古墳の墳形に採用されている。

Wikipedia「群集墳」

群集墳は、古墳時代後期から終末期にかけて造られた狭い区域に集中し密集度の高い古墳群のこと、また、小規模な古墳(円墳、稀に方墳)が群集している状態をいう。さらに、主に墳丘をもったものが多いが横穴墓も群集墳と呼ぶ。

５世紀ごろからの初期群集墳は、小型化していても竪穴式石室、粘土槨、木棺直葬の埋葬施設を備え、鉄製の武器や農耕具など前期古墳と同じような副葬品をもっている。

Wikipedia「日本の古墳一覧」には、全国的に著名な古墳がまとめられている。

Wikipedia　Category「日本の古墳」で都道府県を指定すれば、例えば大阪府の古墳、各都道府県の古墳の記事を見ることが出来る

山陽道の古墳

Wikipedia「石の宝殿」

石の宝殿は、人工的な巨石が残る遺跡などに付けられた名称。兵庫県と大阪府に5ヵ所ある。

大阪府寝屋川市の高良神社裏山にある古墳は、露出した石室から石宝殿古墳と呼ばれ、国の史跡に指定されている。

兵庫県高砂市・宝殿山山腹の生石神社に神体として祭られている巨石。鎮の石室、天の浮石がある。

Wikipedia「石棺仏」

石棺仏とは、古墳から出土した石棺に、仏像やその仏を表す梵字を刻んだ石仏。

石棺仏のほとんどは近畿地方に分布し、その9割以上は兵庫県播磨地方、なかでも加古川流域を中心に加西市、加古川市と、その周辺都市に集中している。しかし藤原時代等の古いものは大阪や奈良に散見することができる。刻まれた仏像のほとんどが阿弥陀如来と地蔵菩薩であることから、浄土宗や浄土真宗の造形であることがわかる。主に阿弥陀如来は来世を、地蔵菩薩は現世を祈念している。播磨

地方の石棺仏の多くが、鎌倉時代、室町時代のもので、播磨地方の、浄土真宗の広がりと供に、民衆が、新田開発や盗掘、自然災害等で出土した石棺を信仰の対象や墓碑としたものである。

　また厳密には石棺仏とは呼ばないが、石棺の蓋などを何も彫らずに立てかけて信仰の対象にしている場合もあり、石棺仏とは、石棺材に特別な霊力を認めての造形であろうと考えられる。これらは、日本の古墳時代と中世の、二つの息吹を同時に感じることができる、貴重な石造遺産である。

岡山市周辺については東遷の吉備で扱う予定である。

広島・山口は、選択する知識もないので、ここでは見送る。

山陰道の古墳

Wikipedia「北山古墳（湯梨浜町）」

　北山古墳(北山１号墳)は、鳥取県東伯郡湯梨浜町野花・長和田にある古墳。形状は前方後円墳。北山古墳群を構成する古墳の１つ。国の史跡に指定されている。鳥取県では最大規模の古墳で、5 世紀前半(古

墳時代中期)頃の築造と推定される。

東郷池周辺は東伯耆地域の首長墓が営まれた地で、北岸の橋津古墳群に始まり南岸の北山古墳で最盛期を迎えたが、大型古墳の系譜はこの北山古墳をもって途絶えている。

古墳域は 1980 年に国の史跡に指定されている。なお後円部の東 50 メートルの地には、変形四神四獣鏡を出土した北山 27 号墳がある。

Wikipedia「造山古墳（安来市)」

造山古墳は島根県安来市にある著名な古墳群。市が古墳群を整備し現在は古代出雲王陵の丘という名の公園となっている。

1 号墳は一辺 60 メートルの古墳時代前期のもので、この時代のものとしては全国でも最大級の方墳である。昭和 11 年、13 年に竪穴式石棺が次々と発見された。副葬品には三角縁神獣鏡、方格規矩四神鏡、紡錘車型石製品、ガラス製管玉、鉄刀、鉄剣、刀子などが発掘された。

3 号墳も古墳時代前期に作られた方墳で 38×30 メートルである。昭和 40 年には竪穴式石室からは斜縁二神二獣鏡、碧玉製管玉、ガラス小玉、刀子、ヤリガンナが出土している。この他兵陵最高所には全長 50 メートルの前方後方墳 (2 号墳) や、小型古墳の 4 号墳があり、この 2 基は 6 世紀前半頃に築造されたものと考えられている。

近隣には、大成古墳もあり造山１号墳同様、古墳時代前期に築造、全国最大規模の方墳であり、石棺からは三角縁神獣鏡・素環頭大刀などが明治44年に出土している。この素環頭大刀の復元を刀匠河内国平が行ったがその現物は安来市立和鋼博物館に展示されている。

鳥取市・湯梨浜町・米子市・安来市・松江市・出雲市などに古墳群がある。

南海道の古墳

Wikipedia「岩橋千塚古墳群」

岩橋千塚古墳群は、和歌山県和歌山市岩橋に所在する古墳時代後期後半の古墳群である。国の特別史跡に指定されている。
約600基の古墳からなり、北方の鳴神地区には花山支群が、南方の岡崎地区には井辺八幡古墳支群がある。また、西方の宮地区には紀国造家が祀る日前神宮・國懸神宮がある。

本古墳群は前方後円墳・円墳・方墳で構成されており、円墳が一番多く、前方後円墳は一パーセントである。6世紀後半頃に造営された

と考えられ、それより1～2世代を下ると群集墳が造られなくなっている。

Wikipedia に、「富田茶臼山古墳」「さぬきの古墳時代」が収録されている。

西海道の古墳

今のところ、九州の前方後円墳の良い分布図を見つけていない。

Wikipedia「**曽根遺跡群**」

曽根遺跡群は、福岡県糸島市にある遺跡群。

ワレ塚古墳、銭瓶塚古墳、狐塚古墳の3基の古墳と平原遺跡で構成され、糸島市東部にある瑞梅寺川と雷山川にはさまれる曽根丘陵地帯に分布、存在している。

Wikipedia「**西都原古墳群**」

西都原古墳群は、宮崎県西都市三宅・童子丸・右松にある古墳群。

国の特別史跡に指定されている。

現在、高塚墳 319 基が現存し、その内訳は前方後円墳 31 基、方墳 2 基、円墳 286 基であるが、他に横穴墓が 10 基、南九州特有の地下式横穴墓が 12 基確認されている。

西都原古墳群は地形的に西都原台地上と、西都原台地と市街地との間に位置する中間台地上の二地域に区分でき、その中で更に 11 の集団、あるいは 10～13 の支群に分けることができる。

「装飾古墳と九州倭人」、九州国立博物館「装飾古墳とは」なども興味深い。

韓国の前方後円墳

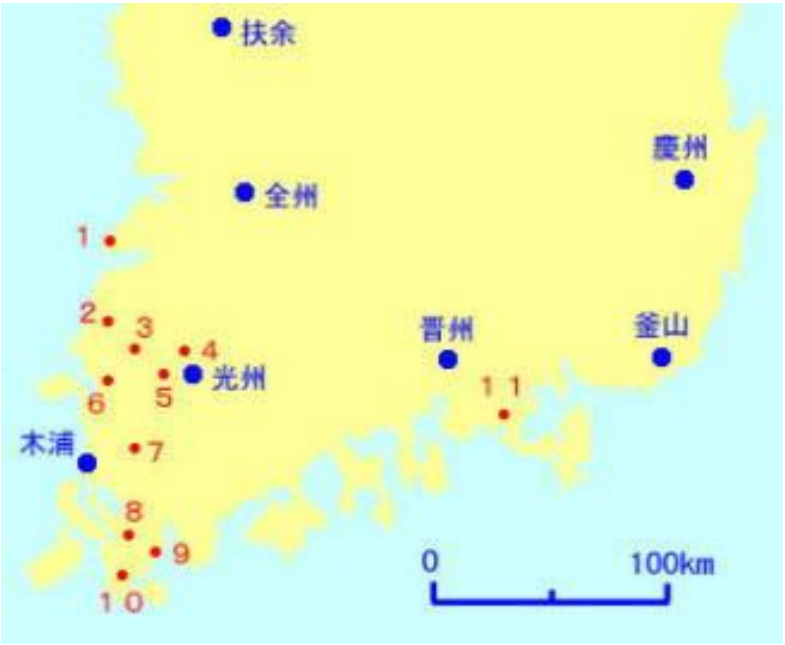


図 VI04 韓国南部の前方後円墳

1 竹幕洞遺跡、2 ウォルゲ古墳、3 新徳古墳、4 月桂洞古墳、5 明花洞古墳、6 咸平長鼓山古墳、7 チャラボン古墳、8 龍頭里古墳、9 海南長鼓山古墳、10 造山古墳、11 松鶴洞古墳

上図は「韓国南部の古代遺跡（1）」から得た。

Wikipedia「朝鮮半島南部の前方後円形墳」の図も面白い。

14.3. 土器のおさらい

遺跡の年代推定において、土器は重要である。日本の土器は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器と変遷したとされている。Wikipediaのこれらの項目について、選択引用を行う。

縄文土器

北海道から沖縄諸島を含む現在でいう日本列島各地で縄文時代に作られた土器である。縄文時代の年代は流動的ながら、約1万6000年前から約2300年前とされる。英文報告書でcord marked potteryとされた。しかし貝塚土器など様々に呼ばれ、結局、縄目文様という発想から命名された縄文式土器の用語が定着した。編年作業が精緻化した今日においては縄文土器の用語が用いられることが多く、その場合、縄文(縄目文様)が施された縄文時代の土器という意味(狭義の縄文土器)と縄文時代の土器一般(広義の縄文土器)という2つの意味で用いられる。

日本列島における土器の出現＝縄文時代の始まりであり、明確な

稲作農耕文化に伴う土器型式は弥生土器とされる。また、上述のように、縄文時代の土器すべてが縄目文様を施すわけではなく、さらに縄文時代を通じて土器に縄文を施さない地域もある。そのため、縄文時代に作られた土器をもって縄文土器であるという定義もある。このような定義は再帰的かつ同語反復にも見えるが、あまりにも多様で、土器であるという以上の普遍的定義が難しい縄文土器の実態を考えると、境界領域では納得せざるをえない。

縄文土器は、尾張を境界に、東日本と西日本の文化圏に大別される。西日本は、装飾の少ない簡素な土器が中心となる。東日本は、東北に見られる亀ヶ岡式土器のように、火炎型の土器が特徴的である。ただし、亀ヶ岡式は、祭祀用と見られ、東日本でも日常土器は簡素なものが多い。

西日本では、縄文晩期(弥生初期)、縄文土器は、刻目突帯文土器である。この土器は、板付遺跡などの水田のある最古の層の大部分を占める。そのうちの数%の土器は、形は突帯文土器だが、技法は朝鮮無文土器であった。その後、形は縄文系を保つが、作成の技法は、半島の無文土器を使う弥生土器である板付Ⅰ式に変わる。この意味で、西日本の縄文土器は、弥生土器の系譜に連なっている。

弥生土器

縄文土器にくらべて明るく褐色で、薄くて堅い。このような色調や器肉の厚さの違いは、縄文土器が焼成時にまさしく器面を露出させた野焼きをするのに対し、弥生土器が藁や土をかぶせる焼成法を用いたことに由来する。このために焼成温度が一定に保たれて縄文土器にくらべて良好な焼き上がりを実現できたと思われる。こういった焼成技法は、土器の焼成前の赤彩(縄文土器は焼成後に赤彩)といっしょに九州北部で発生したと推察されるが、九州から関東まで時期差があり、弥生土器の出現が東に行くにしたがって遅くなることと関係が深いと思われる。また強度を増すためにつなぎ(混和材)として砂を用いたために、器面に大粒の砂が露出しているのがみられることがある。

弥生時代とその後に続く古墳時代との境界は曖昧であったが、1934 年に大阪府豊中市の庄内小学校遺跡から出土した庄内様式と、1938 年に奈良県天理市の布留遺跡から出土した布留様式とが見出された。これらは古墳時代の土師器と分類され、古墳時代との境界がこの時、明瞭になった。

弥生早期に続く弥生前期、北九州の水田農耕は、西日本文化圏に急速に広がる。しかし、尾張の西半分で、拡大は一時、停滞する。この境界は、縄文晩期の櫛目突帯文土器の境目で、西日本文化圏の端でもあった。

土師器

土師器とは、弥生土器の流れを汲み、古墳時代から奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけ（土師質土器）・焙烙に取って代わられるまで生産された素焼きの土器である。須恵器と同じ時代に並行して作られたが、実用品としてみた場合、土師器のほうが品質的に下であった。埴輪も一種の土師器である。

古墳時代に入ってからは、弥生土器に代わって土師器が用いられるようになった。土師器の土器形式として庄内式や布留式(奈良県天理市布留遺跡から出土)と命名され、庄内式土器の方が古い段階の土師器とされた。この庄内式土器の段階では定型化した大型の円墳は未だ出現しておらず、庄内式土器は、古墳出現以前の土器である説が有力とされる。形式順序は弥生 V 期、庄内式、布留式という順にな

る。

小さな焼成坑を地面に掘って焼成するので、密閉性はなく酸素の供給がされる酸化焔焼成によって焼き上げる。そのため、焼成温度は須恵器の場合より低い 800-900 度で焼成されることになり、橙色ないし赤褐色を呈し、須恵器にくらべ軟質である。

9 世紀以降は土師機工人集団（恥部）と末木港人集団（東部）との交流が活発になり、轆轤土師器、土師質土器などと呼ばれる両者の中間様式の土器が多量につくられるようになった。中世に入って登場するかわらけは、土師器本来の製法を汲む手づくね式の土器で、主として祭祀用として用いられた。現在でも一部で、厄除けや酒席の座興としてかわらけ投げがおこなわれることがある。なお伊勢神宮で神事に用いられる土器はすべて三重県多気郡明和町の神宮土器調整所で造られる土師器である。

須恵器

須恵器は、日本で古墳時代から平安時代まで生産された陶質土器(炻器)である。青灰色で硬い。同時期の土師器とは色と質で明瞭に区

別できるが、一部に中間的なものもある。

須恵器の起源は朝鮮半島(特に南部の伽耶)とされ、初期の須恵器は半島のものと区別をつけにくいほど似ているが、用語としては日本で製作された還元焔焼成の硬質の焼物だけを須恵器という。朝鮮半島のものは、普通名詞的に陶質土器と呼ばれるか、伽耶土器・新羅土器・百済土器などもう少し細分した名で呼ばれている。

縄文土器から土師器までの土器は、日本列島古来の技法である輪積み(紐状の粘土を積み上げる)により成形され、野焼きで作られていた。このため焼成温度が800～900度と低く、強度があまりなかった。また、酸化焔焼成(酸素が充分に供給される焼成法)となったため、表面の色は赤みを帯びた。それに対し、須恵器は全く異なる技術(轆轤技術)を用いて成形し、窖窯と呼ばれる地下式・半地下式の登り窯を用いて1100度以上の高温で還元焔焼成されることで強く焼締まり、従来の土器以上の硬度を得た。閉ざされた窖窯の中では酸素の供給が不足するが、高熱によって燃焼が進む。燃料からは、酸素が十分なら二酸化炭素と水になるところ、一酸化炭素と水素が発生する。これが粘土の成分にある酸化物から酸素を奪う、つまりは還元することで二酸化炭素と水になる。特徴的な青灰色は、粘土中の赤い酸化第二鉄が還元されて酸化第一鉄に変質するために現れる。基本的には釉

薬をかけない。釉のかかったものも見られるが、これらの多くは窯の燃焼中、燃料(薪)の灰が製品に付着し、高熱で融解して偶然生じた自然釉である。

14.4. 壬申の乱と南北朝

皇位継承をめぐる争いが戦闘になった例として、壬申の乱と南北朝が挙げられる。

壬申の乱は本稿で対象と考えているので、後で扱う予定である。

Wikipedia「壬申の乱」では

壬申の乱は、天武天皇元年6月24日-7月23日(672年7月24日-8月21日)に起こった古代日本最大の内乱である。天智天皇の太子大友皇子に対し、皇弟大海人皇子(後の天武天皇)が兵を挙げて勃発した。大海人皇子は7月24日に吉野を出立した。伊賀に入り、積殖で長男の高市皇子の軍と合流した。美濃に入り、東国からの兵力を集め7月31日に軍勢を二手にわけて大和と近江の二方面に送り出した。8月8日に息長の横河で戦端を開き、以後連戦連勝して箸墓での闘いでの勝利を経て進撃を続けた。8月20日に瀬田橋の戦いで近江朝廷軍が大敗すると、翌8月21日に大友皇子が首を吊って自決し、乱は収束した。

と書かれている。1週間で、吉野から名張(伊賀)を経て、関ヶ原まで

進軍したことになる。

一方、南北朝では、戦闘が長期化し、1336 年から 1392 年の間は 2 王朝が対立、したがって、並立した。

Wikipedia「南北朝時代（日本)」では

建武の新政の崩壊を受けて足利尊氏が新たに光明天皇(北朝側)を擁立したのに対抗して京都を脱出した後醍醐天皇(南朝側)が吉野行宮に遷った 1336 年(延元元年/建武 3 年)から、南朝第 4 代の後亀山天皇が北朝第 6 代の後小松天皇に譲位するかたちで両朝が合一を見た 1392 年(元中 9 年/明徳 3 年)までの、56 年間をいう。

皇統は、すでに持明院統と大覚寺統という二つの相容れない系統に割れた状態が恒常化するという実質的な分裂を招いていた。それが倒幕と新政の失敗を経て、この時代になると両統から二人の天皇が並立し、それに伴い京都の北朝と吉野の南朝の二つの朝廷が並存するという、王権の完全な分裂状態に陥った。両朝はそれぞれの正統性を主張して激突し、幾たびかの大規模な戦が起こった。また日本の各地でも守護や国人たちがそれぞれの利害関係から北朝あるいは南朝に与して戦乱に明け暮れた。

足利義満の斡旋で、大覚寺統と持明院統の両統迭立と、全国の国衙

領を大覚寺統の所有とすることを条件に、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を渡し、南北朝が合体した(明徳の和約)。

図 VI05 は南北朝前後の皇統を Wikipedia「皇室の系図一覧」から写したものが次図である。

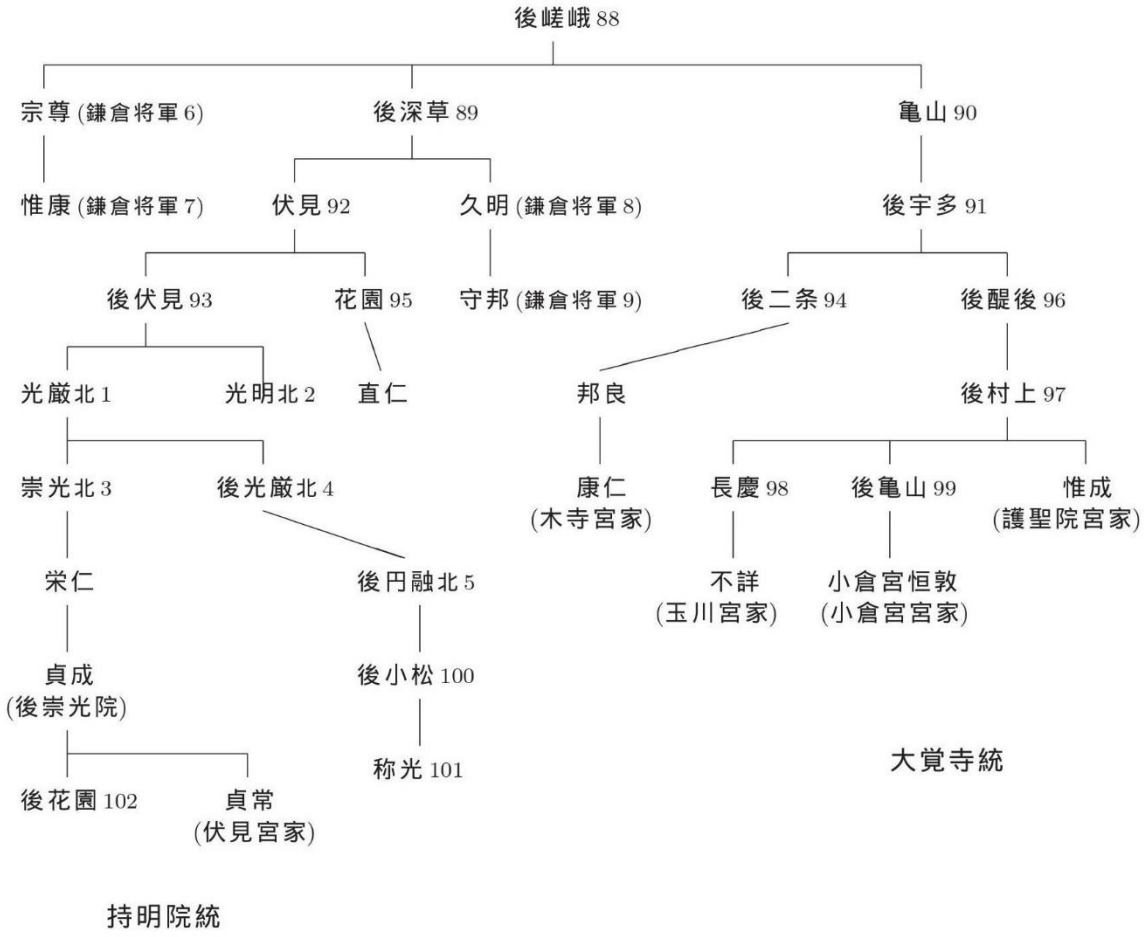


図 VI05 南北朝の天皇

結果を簡単に言えば、過去は南朝側の天皇を認めるが、今後の天皇は北朝側から選ぶということになる。これは、北朝側が圧倒的に優勢であったことに依る。

2 王朝が離れて並立していた場合で天皇の在位年数が増えても問題にならないとすれば、交互に並べることも可能となる。

14.5 官職など

大宰・総領

Wikipedia「大宰府」

大宰とは、地方行政上重要な地域に置かれ、数ヶ国程度の広い地域を統治する役職で、いわば地方行政長官である。大宝律令以前には吉備大宰(天武天皇 8 年(679 年))、周防総令(天武天皇 14 年(685 年))、伊予総領(持統天皇 3 年 (689 年)) などあったが、大宝令の施行とともに廃止され、大宰の帥のみが残された。

続日本紀文武天皇 4 年(700 年)10 月の条に「直大壱石上朝臣麻呂を筑紫総領に、直広参小野朝臣毛野を大弐 (次官) と為し、直広参波多朝臣牟後閇を周防総領と為し」とあるように総領とも呼ばれた。

大宝律令(701 年)によって、九州の大宰府は政府機関として確立したが、他の大宰は廃止され、一般的に大宰府と言えば九州のそれを指すと考えてよい。また、その想定範囲は、現在の太宰府市および筑紫野市に当たる。平城宮木簡には筑紫大宰、平城宮・長岡京木簡には大宰府と表記されており、歴史的用語としては機関名である大宰府という表記を用いる。唐名は都督府である。

三国志の(一)大率と同じ役割のようである。大宰府は国では筑紫に当たる。これ以外に、吉備・周防・伊予にもあったのは、東遷の立場からは、興味ある。

Wikipedia「総領」

総領(惣領)とは、律令制が完成する前の 7 世紀後半に諸国に置かれていた地方官のこと。ただし、日本書紀・続日本紀に記された名称は統一されておらず、惣領・総令など複数の表現がある。
総領が設置されていた地域として、坂東・吉備・筑紫・伊予・周防などが知られており、坂東・筑紫などの広域地名や伊予が讃岐国の事を扱ったり、吉備が播磨国の事を扱った記録もあるため、後世の大宰府のように複数の令制国に相当する地域を統括していたとする見方がある。

その一方で日本書紀には大宰と呼ばれる地方官が少なくても吉備と筑紫に置かれており、壬申の乱の際に大友皇子(弘文天皇)の使者が募兵を両大宰に求めて筑紫大宰の栗隈王に拒絶される場面があることから現地の軍事権を掌握する立場にあったことが知られている。

総領と大宰との関係については諸説があり、両者が同一のものな

のか、上下関係にあるのか議論がある。

総領や大宰が登場するのは、日本書紀推古天皇 17 年(609 年)に登場する筑紫大宰から続日本紀・文武天皇 4 年(700 年)に登場する筑紫惣領、周防惣領、吉備惣領までの 100 年弱に過ぎず、史料が極めて少ない。更に孝徳天皇の時代に設置されたと推定されている坂東総領を除くと、その活躍は天武天皇から文武天皇の時期に集中しているのも特徴と言える。

Wikipedia「大宰帥」では

大宰帥は、大宰府の長官。律令制において西海道の 9 国 2 島を管轄し、九州における外交・防衛の責任者となった。9 世紀以降は親王の任官で、大宰府に赴任しないことが慣例となり、実権は次官の大宰権帥及び大宰大弐に移った。

Wikipedia「吉備国」では

吉備国守、吉備大宰、吉備総領は、日本書紀、風土記、続日本紀に散見される官職で、吉備国分割の前後に設置されたらしい。職掌、管轄範囲、存続期間は伝わらない。大宰府の前身とおぼしき筑紫大宰とともに、中央から派遣され、管下の複数の国の外交と軍事を統括する任務を負ったものと推測される。史料に見える最後は、文武天皇 4 年

(700年)の吉備総領任命記事である。遅くとも大宝律令制定までに廃止された。

と書かれている。

　大宰または惣領と呼ばれる、中国の都督に似た官職があり、筑紫・吉備・周防・伊予に置かれた。ことは興味ある。

　Wikipedia「和泉監」では

　霊亀2年(716年)3月、元正天皇は河内国和泉郡に珍努宮(和泉宮)造営を計画し、和泉郡に加えて日根郡を和泉宮の経費に供した。同年4月19日に、さらに大鳥郡を割き、これら3郡を管掌するために和泉監を分立した。和泉監の職掌は天平9年(737年)の和泉監正税帳によると一般国司とほぼ同じであると記されているが、摂津職が難波京の管理を担当したのと同様に、珍努宮の管理も担当した。

　その構成は、正(長官)・佑(判官)・令史(主典)の各1名であり、次官は存在しない。霊亀2年(716年)6月には史生3名を設置している。大宝令では、在外の監司について公式令53が規定されており、和泉監と芳野監の2つによって実現されている。

Wikipedia「芳野監」では

大和国の吉野郡を分立させて設けられた。律書残篇によると、芳野監は“郡二、郷三、里九”とある。律書残篇の大倭国(大和国)の郡数は 14(当時の大和国の郡数は吉野郡を入れて 15)となっているため、吉野郡が 2 つの郡に分けられたと思われる。設置時期は不明だが、続日本紀の和銅四年 4 月 9 日条(711 年)には大倭国芳野郡があるため、それ以降の和泉監が設置された霊亀 2 年(716 年)に近い時期と思われる。

史料上に登場するのは、続日本紀の天平四年(732 年)7 月 5 日条に両京・四畿内及二監とあるのが初で、同五年(733 年)1 月 27 日条に芳野監が初見する。国でなく、監という機関になったのは、この地にあった吉野宮の管理にあたる役割があったためと推測されている。

五畿七道

普通に解釈すれば、畿が 5 つで道が 7 つとなる。用語的には一畿七道と思うが、とにかく、Wikipedia「南海道」にあった、(整えられた時期は解らないが)構成する国を写す。

畿内：山城 大和（芳野）河内 和泉 摂津

東海道：伊賀 伊勢 志摩 尾張 三河 遠江 駿河 伊豆 甲斐 相模

武蔵 安房 上総 下総 常陸

東山道：近江 美濃 飛騨 信濃（諏方）上野 下野 出羽(羽前 羽後)

陸奥(岩代 磐城 陸前 陸中 陸奥)(石背 石城)

北陸道：若狭 越前 加賀 能登 越中 越後 佐渡

山陰道：丹波 丹後 但馬 因幡 伯耆 出雲 石見 隠岐

山陽道：播磨 美作 備前 備中 備後 安芸 周防 長門

南海道：紀伊 淡路 阿波 讃岐 伊予 土佐

西海道：筑前 筑後 豊前 豊後 肥前(値嘉）肥後 日向 大隅(多禰)

薩摩 壱岐 対馬

畿内に近い用語は京阪奈であろうか。このうち、山陽道と南海道に属する国が神武東征に現れる。南海道の国は紀伊のみで、他は山陽道の国である。

海路ならば、地形的に四国に近い航路をとると思われる。

神武東征では、九州から安芸が海路、安芸から吉備までが陸路、吉備から難波の碕までが海路となっている。海兵隊的な部隊による

南海道ルートと、陸戦による山陽道ルートによる東征がなされ、神武東征はこれらから選んで造られたのではないか。あるいは、海兵隊による部隊が先行され、陸戦による、山陽道ルートと南海道ルートが並行して行われたかと考える。

山陽道の大阪府内は西国街道で、ほぼ名神高速にあたる。

Wikipedia「東山道」に、平安時代に、平安京との間の運脚(運搬人夫)の延喜式による日数が書かれている。上りは調と庸とともに旅費にあたるものも携行したため、下りの約 2 倍の日数を要したとされる。

近江国府: 1 日/0.5 日	滋賀県大津市	10 Km
美濃国府: 4 日/2 日	岐阜県垂井町	95.5Km
信濃国府: 21 日/10 日	(上田市→)松本市	335.6Km
上野国府: 29 日/14 日	群馬県前橋市	516 Km

このデータは道路がかなり整備された平安時代中期 905 での基準で、五王の時代の 5 世紀はこれより 500 年程前のことである。

平氏の都落ち

Wikipedia「治承・寿永の乱」にある後期が平氏の敗退の経緯である。ここに書かれている戦いは、

一ノ谷の戦い：摂津国福原および須磨

屋島の戦い：讃岐国屋島

壇ノ浦の戦い：長門国赤間関壇ノ浦

である。東から攻めてくる敵を迎え撃つので、西から東を攻めるのとの差はあるが、3か所挙げるとすれば、こんな所かとも思う。

保暦間記 を読めれば、もう少し何かが得られるかもしれないが、古文を読むのは、筆者にとっては、英文を読むよりは難しいと感じている。

なお、国立文学研究資料館には、新日本古典籍総合データベースがある。

織田信長

短期間で征服した例として、織田信長を見ていく、

信長が尾張を統一したのは 1559 年で、本能寺で倒れたのは 1582 年である。この時の支配地域は、徳川を含めて、新潟を除く中部地方と近畿地方であった。秀吉の天下統一は 1590 年で両者合わせて 30 年程である。これは西征といえないこともない。この間、居城は 清州城 → 岐阜城 → 安土城 → 大阪城 と替わった。岐阜城は山城で、他は干潟に浮かぶ島に築かれた。もう少し生きていたら、大阪を居城としたであろうか。岐阜城の後は、東海道と中山道を西に向かい、両道の東は徳川家康に託した。安土以後は、北陸道と山陽道を目指した。

近江攻略以降は、清州城・岐阜城には代官程度の家臣で、行政能力に秀でたものが配置されたではないか。敵の進軍の情報を得てからでも安土条から駆けつけることが可能で、この 2 城が適に攻められることは殆ど考えられなかった。したがって、この 2 城の役割は、治安と濃尾平野で生産された軍需物資を集積し、前線に送り届けることではないか。

信長の死後、後継をめぐって、柴田勝家と羽柴秀吉との争いが起きたことはよく知られている。

「信長家臣団まとめ。組織図・変遷・各方面軍団の顔ぶれなど。」

15. 海流・和鉄・DNA 解析

序

Part I で復元古代船の野生号について引用した。このとき、古代帆船と航法についても調べてみたが、適切な解説は見つからなかった。

Captain Fleet→資料館「古代の帆船」に、古墳時代には、すでに簡単な帆があらわれていたようです、と書かれているが、これ以上の資料は得られていない。幾つかの気なっている項目を挙げていく。

航海に影響が大きいものとして、海流が思い浮かぶ。調べていくうちに、海流は、大きな海水の流れで、航海に影響するのは潮流であるということである。乱流の話では、障害物がある場合、その後ろでは、複雑な流れが発生するということがあった。これと同じ原理に基づくものと理解した。

倭国を考えるとき、鉄が意味をもっていると想っている。前に述べたが、倭の移住には、鉄資源の枯渇が影響していると考えている。これに関して、「IRON ROAD ・和鉄の道」というサイトを見つけた。こ

のサイトは、Mutsu Nakanishi さんによる製鉄遺跡の探訪記であるが、写真と、資料の纏めがあり、興味深い。幾つかの遺跡の記事から、興味あるものの抜粋引用となる。

DNA 解析を古代史に用いた研究成果が発表されるようになった。まだ、ほうが的研究の段階と思っているが、今後期待できる分野と考える。

15.1. 海流と船

近年、北朝鮮の漁船の漂着が問題となっている。漂着地は、山陰海岸・能登半島・秋田・北海道などである。これらの漂流記録がわかれば面白いのだが、捜査記録では簡単にはいかないであろう。また、ハングルが書かれた廃棄物が、山陰海岸を主に流れ着いている。これらは海流によるものとされている。

日本書紀でも、高麗の使者が越の国に流れ着いた記事がある。

2.4 節 女王国への旅程 で、「日韓古代文化研究会・野生号」の記事を引用した。ここでは海流のことは記憶にない。細部は斜め読みなので、見落としたかもしれない。

ここでは、興味をもったサイトの紹介を行っていく。

＊ Wikipedia「対馬海流」から、日本列島近海の海流の図を 図 VI01 として引用する。(なお、1.黒潮 2.黒潮続流 3.黒潮反流 4.対馬暖流 5.津軽暖流 6.宗谷暖流 7.親潮 8.リマン(Liman)寒流 である。)

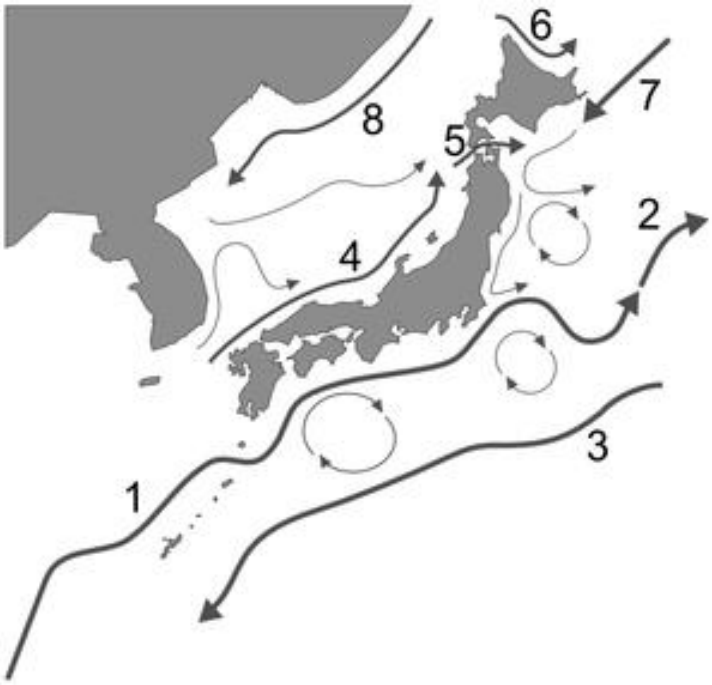


図 VI06. 日本海の海流

また、万葉集の、巻一（八）額田王の歌

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

Japanese Text Initiative→Manyoshu→Book I

後岡本宮御宇天皇代 天豊財重日足姫天皇位後即位後岡本宮

額田王歌

熟田津尓 船乗世武登 月待者 潮毛可奈比沼 今者許藝乞菜

からは、船旅において潮待ちをすることは、日常のことであったと考えられる。

＊　「邪馬台国大研究」→「科学する邪馬壹國」→「古代の船と航海ルート」では、船の考察から公開ルートまで扱われている。ここでは、海流に関しても触れられており、次が書かれている。

朝鮮西岸のような潮の干潮による流れの変化が激しい所では、順潮が利用できる。（但し、逆潮の場合は潮待ちの要あり。）

渡航の季節はどうだろう。人力航海の第一条件が、快晴・無風・視界良好・波穏やか、というのは常識である。三国史記に出てくる倭の新羅襲撃は、旧暦の4－6月に集中しており、9－1月の間は全く見られないという。実際、今日の海洋気象台の観測値を元にしても、先の条件に一番合致するのは7月である。7月が一番波が低く穏やかであり、8月に入ると荒くなり9月以降は平均値が高波となる。

対馬海流は相当の早さで流れている。平均 1.3 ノットと言われるこの海流に、3ノット程の古代船が航行するには大分難儀を強いられそうだが、経験によりあらかじめどう流されるかがわかっていれば問題ない。初めから流される事を想定して船首をその方角に向ければいいのである。ただ、計算外に流されてしまった場合は問題である。

と書かれている。もう少し具体的に議論されているものはないかと

探してるうちに、

＊　「魏志倭人伝の夢」というサイトを見つけた。ここに「狗邪韓国から対馬へ」という記事があり、面白いことが書かれている。かなり長いものであるため、引用の代わりに、大まかに理解し得たことを以下で述べる。

　対馬海流は西南から東北に向かって流れている。実際の潮流は、島の影響で複雑なものになっている。乱流で、流れに障害物をおくと、その後ろに渦巻きが現れる話がある。

　ここに、画像は九州大学応用力学研究所の対馬海峡表層海況監視海洋レーダーシステム より許可の上転載として、次の図があげられている。

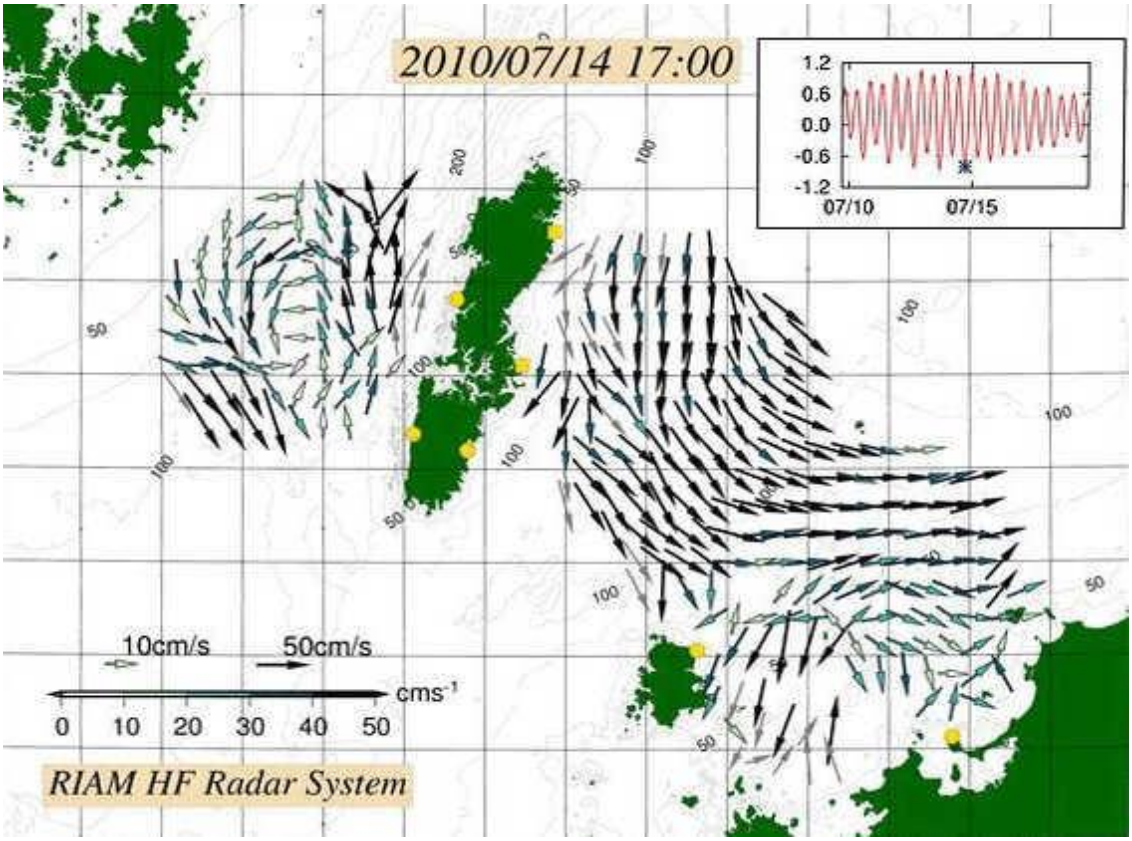
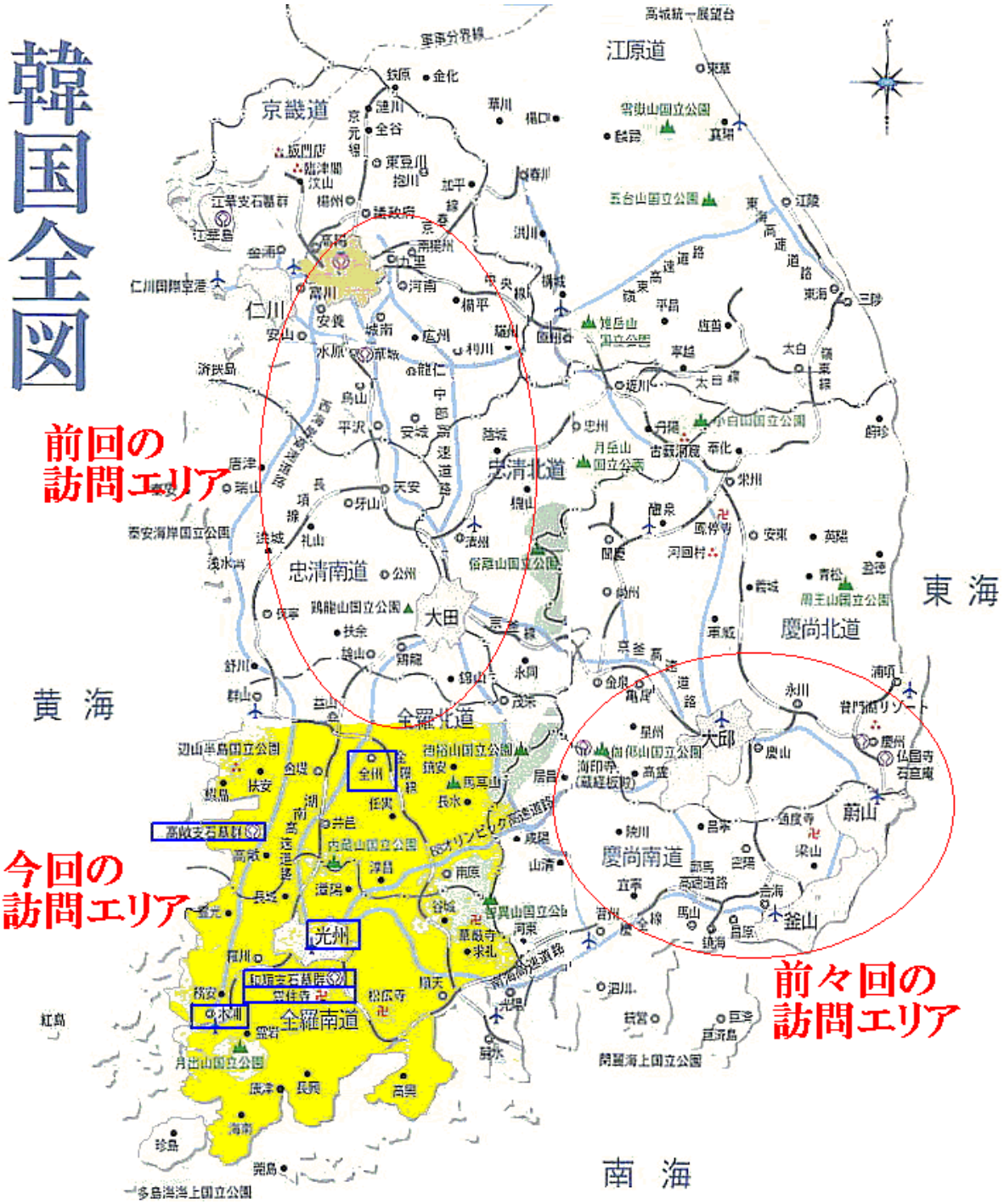


図 VI07 対馬周辺の海流

この後、上図などを用いて、航路の詳細な検討が為されている。これも簡単にいえば、「潮目を読んで適切な航路を選べば、かなり楽にたどりつける」と理解している。

この他に、「邪馬台国大研究」には「邪馬台国の人口はどのくらいだったか？」のような興味ある記事も載せられている。このサイトで韓国地図を見つけた。漢字表記と遺跡が書かれているため、引用する。



VI08 韓国地図（漢字表記）

＊　「大王のひつぎ実験航海事業」では、「7 月 24 日に宇土市の宇土マリーナを出発、8 月 26 日に無事，大阪市の大阪南港に到着することができた」とある。ここの写真からは、荷物はなく、漕ぎ手も 16 人ほどと思われる。　　（2020/8/6 日時点でアクセスできない。）

＊　「再現された遣唐使船が中国・上海へ向けて大阪を出港」もある。

この他に思いついた話題を挙げる。

Wikipedia「方位磁針」

11 世紀の中国の沈括の夢渓筆談にその記述が現れるのが最初だとされる。沈括の記述した方位磁針は 24 方位であったが、後に現在と同じ 32 方位に改められた。

原型となるものとしては、方位磁針相当の磁力を持った針を木片に埋め込んだ指南魚が 3 世紀頃から中国国内で使われていた。指南魚を水に浮かべることで、現代の方位磁針とほぼ同様の機能を実現する。名前に魚とつくのは、多くの場合木片を魚の形に仕上げ、魚の口の部分が南を向くようにしたもの(文字通り、南を指す魚＝指南魚)が使われていたため。

方位磁針の改良によって航海術は著しく発達し、大航海時代が始

まった。実用的な方位磁針として最初に出現したのは、容器に入れた水の上に磁針を浮かせることで自由な回転と水平面の確保を同時に実現する方法だった。この方位磁石の欠点は、激しく揺れる船上で正確に方位を知るのが難しい点である。揺れる船上で方位を知る装置として、宙吊り式羅針盤が開発された。

Wikipedia「航法」

古代から陸地の見えない遠洋での航海を行っていたポリネシアやミクロネシアの先住民たちは、先祖からウェイファインディングを受け継いだマウ・ピアイルックのような航法師(パルゥ)に弟子入りし、ポゥのような通過儀礼を経て一人前と認められた。

Wikipedia「天測航法」

天測航法または天文航法とは、陸地の見えない外洋で天体を観測することで船舶や航空機の位置を特定する航海術である。数千年に亘って徐々に発達してきた。目に見える天体(太陽、月、惑星、恒星)と水平線(視地平)の角度(仰角、天測航法では高度角と呼ぶ)を計測するのが基本である。太陽と水平線から太陽の高度角を計測するのが最も一般的である。熟練した航海士はそれに加えて月や惑星や航

海年鑑に座標が出ている57個の恒星を使う。

天測航法は、空に見える天体と視地平との間の角度を測定することで、地球上の現在位置を求める技法であり、海上だけでなく陸上でも使える。ある与えられた時点において、どの天体であってもそれが真上に見える場所は地球上に１カ所しかなく、その位置は緯度と経度で表される。その地理的位置を天体のgeographic position と呼び、その正確な位置は航海年鑑や航空年鑑に表の形で秒単位で示されている。天測計算sight reductionと呼ばれる計算を行うことで、航海図や位置決定用図に位置の線Line Of Positionと呼ばれる線をひく。測定を行った観測者はこの線上のどこかに位置している。

キトラ古墳・高松塚古墳の星縮図については、「古星図に見る歴史と文化」があった。

15.2. 和鉄の道

製鉄は倭を考えるときのキーの１つと考えている。何かチュートリアル的なサイトを探しているうちに、「IRON ROAD ・和鉄の道」というサイトを見つけた。この作者は、製鉄会社を定年退職した後、日本の製鉄の歴史に関連する遺跡巡をし、その記録が IRON ROAD 和鉄の道である。探査地は日本全国に広がり、20 年弱の間に 100 以上の遺跡群が報告されている。書かれていることは、遺跡の紹介に止まらず、文献から、遺跡の考察まで及んでいる。また、研究機関が行っている、古代製鉄に関するシンポジウムの参加記録も含まれている。

このサイトを知ったのはかなり初期であり、本稿を書くきっかけの１つでもある。

「和鉄の道 全 file 収蔵 Dock」は全リストで、「和鉄の道 全 file 収蔵 Dock 古代」は古代のリストである。ここでは、古代史に関係すると思われる地域のほぼ全てを網羅している。このうち、東遷に関連すると思われえる話題を拾い、抜け書きをしていく。拾い挙げるものは、製鉄遺跡と神社、および、関連する豪族名などを予定している。これらと豪族の出自を東遷と結び付けての考察は、現状では、疑問や作業仮説を設定するにも不十分であり、今後の考察の為のメモを付

していくことにする。良く言えば、予備的考察ということである。

＊　「古代世界の鉄生産 中近東から東アジアまで」では、紀元前 3 世紀から紀元 1 世紀にかけての匈奴の時代に、製鉄技術を持たぬと思われていた匈奴は塊錬鉄製鉄法で鉄を作り、世界を駆け巡ってた。この匈奴の時代そんな塊錬鉄の製鉄技術の痕跡がユーラシア大陸中央の草原に点々とあり、モンゴル・西シベリヤやバイカル湖周辺にも及んでいるという。

＊　Wikipedia「匈奴」では、匈奴(拼音: Xiōngnú)は、紀元前 4 世紀頃から 5 世紀にかけて中央ユーラシアに存在した遊牧民族および、それが中核になって興した遊牧国家(BC209-93)。モンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部に一大勢力を築いた。

＊　「加耶の鉄と倭国」では、日本列島への鉄の伝播について、次の記述がある。

1.　縄文晩期―弥生前期　紀元前 2 世紀 $¥sim$ 紀元 1 世紀: 鋳造破片再生の時代

　中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中

国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鋳物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。

2. 弥生時代中期～後期　紀元１世紀～3 世紀初頭：原始鍛冶の時代

　薄く板状に鋳込み表面脱炭された素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われる。

3.　弥生時代後期以降～古墳時代中期、2 世紀～4 世紀：鍛打伸展鍛冶の時代

　中国では脆い鋳鉄鋳物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状錬鉄が得られるようになり、日本では、脱炭鋳鉄と同時にこれらを素材とした鍛錬加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。

4.　古墳時代初頭以降 初期～中期、3 世紀中半～5 世紀： 本格鍛冶の時代

　大陸では塊状鉄精錬が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精錬がスタートしたと見られるが、はっきりしない。この当時　半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4 世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄が鍛冶原料として持ち込

まれるようになる。当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。5世紀後半になると畿内には大県遺跡など大規模な専業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。

5.　古墳時代中後期～飛鳥・奈良、5世紀末～8世紀：鉄生産・鉄の自給拡散の時代

　その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精練が日本国内(吉備)で始り、鉄素材の自給が始まった。また、国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精練も始り、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。7 世紀末から 8 世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。

　6．7．は省略

　定説とされているものをまとめた感がするが、幾つかの疑問が生じる。1.2．については、中国にその起源をもつ鉄器が発掘されたの

か。3.4. については、前の記事では、中国では漢の時代には溶融鉄還元間接法であった。加耶については、三国志の 國出鐵 韓 穢 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡 を前提としているように思えるが、用鐵 如中國用錢 はそんなに生産が多くないことを意味しているのではないか。

＊ 「南北市糴 朝鮮半島と倭を結ぶ「和鉄の道」では、「魏志倭人伝の時代 朝鮮半島の鉄との交易品は何か」についての見解が書かれている。交易を考えるならば、当然おきる疑問である。

＊ 「鉄の６世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて」では、**熊本県菊池川中流域の装飾古墳を訪ね、装飾古墳の集積地の分布地図を見て、この装飾古墳の集積地が日本各地の産鉄の地に重なるのにビックリ。ちょうど同じ頃、河内生駒山の南端が大和川に落ちるところに存在する大県製鉄遺跡(5 世紀後半の大和王権の大鍛冶工房。精錬を開始していたのでないかと見られる)と重なる生駒連山南端の高井戸横穴古墳群の中にも同じような形象文様の横穴墳があること思い出し、装飾古墳は鉄の自給のため、大陸・朝鮮半島からやってきた産鉄の技術集団の足跡ではないか、鉄の自給に必死に取り組んだ**

この時代　先たたらの技術集団と重なるのではないか、と夢を膨らませました。

＊　「九州 古代の豊の国から阿蘇へ」では、これについては、紹介できるほど見ていない。宇佐神宮と臼杵石仏から阿蘇にかけて調べられている。

＊　「福岡 元岡製鉄遺跡群を訪ねて」では、1次調査(1997)から42次調査(2005)まで数々の発掘調査で古代の製鉄・生産遺構群や古代官衙遺構・古墳後期群集墓(約70基)や前方後円墳(7基)などが次々と出土した。これらの製鉄生産遺構群や数々の遺跡は記録保存の後、建設進行中の九州大学新キャンパス用地として消えてしまうが、製鉄炉が建ち並ぶ第12次調査の谷や20次調査地点などの重な製鉄遺跡をはじめ、幾つかの製鉄遺跡は将来の遺構整備・保存を前提に現在埋め戻し・盛土の保存がなされており、今後の整備が九州大学・福岡市で協議が進められている。

伊都国のあったとされる糸島にある。

＊　「今治市　高橋佐夜ノ谷(2)製鉄遺跡をたずねて」では、6 月 25 日届いた「発掘された日本列島 2006　新発見考古速報」によると昨年四国で初めて製鉄遺跡が今治市のある高縄半島の丘陵地で発見された。7 世紀後半から 8 世紀に遡れる古代の製鉄遺跡が発見され、そして、同じ丘陵地からは詳細は不明であるが、鍛冶炉を持つ住居跡がいくか出土し、この丘陵地で古代製鉄・鍛冶加工の鉄作りがされていたという。

＊　「卑弥呼の邪馬台国」の候補地を訪ねる【2】」では、善通寺のすぐ北東側に広がる平地部は縄文時代から中世にかけて絶えず受け継がれてきた大集落で、特に弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、大いに栄え、日本各地の人々が交流した讃岐国の中心の大都市集落で、大集落跡を示す数多くの遺構と共に数々の周辺諸国の物品・土器などの遺物が出土している。かつて、この地が練兵場であったことから、旧練兵場遺跡と名づけられた。まだ、遺跡全体が発掘調査されたわけではないが、遺跡野大きさはほぼ吉野ヶ里遺跡にも匹敵し、ここに卑弥呼の邪馬台国があったと提案する研究者もいる。

＊　「吉備の鉄と桃太郎伝説」では、古代、総社のあたりまで内海が

入り込み、古墳・丘陵が点在する。その一番左岡山よりの丘陵地が吉備の中山。眼下に広がる平野は古代吉備の国のまさに中心。古代、朝鮮半島から北九州・瀬戸内海を通って大和へ至る大陸文化交流の道の真中にこの吉備の国がどっしりと座っている。渡来の民によって持たらされた製鉄の技術がこの吉備の国に根付き、この古代鉄の一大生産地の覇権をめぐって諸国が争った。

記事の吉備の中山は岡山市の西部、吉備線が上に凸になっている辺り。津山の中山神社とは異なる。この山の東に吉備津彦神社がある。

※　「備前一宮　「石上布都 魂神社」を訪ねて」では、岡山県東部、吉井川と旭川にはさまれた山また山の真ん中に石上布都魂神社がある。(岡山県赤磐市石上)背後の旭川水系・吉井川水系の中国山地は古代吉備の大製鉄地帯。そして　この地には大和王国の中心にいて、軍事・鉄の生産を直接支配した物部氏の足跡が点々と残っている。

歴史作家 関裕二氏は、物部氏のルーツはこの地。初期大和王権成立にかかわった吉備は＝物部氏ではないか、との説を唱えている。

現時点では、吉備王朝といえるものがあったと思っている。また、

対するものがあったはずで、これは、阿波王朝ではないかと考えている。王朝ではなく、倭の東遷軍の山陽道方面軍と南海道方面軍といったほうがいいかもしれない。

神武東征では、安芸から吉備へは徙入となっていることから、山陽道方面軍は陸軍が主力で、播磨・摂津と面で攻略していったと考えられる。大阪府の東辺に高槻がある。その対岸が枚方で。ここに継体天皇紀に書かれている最初の宮である樟葉宮がある。

神武東征の吉備以降は船による移動となっている。こちらが近畿地方に先着したと考える。

＊　「播磨国風土記　和鉄の道【1】」

「播磨国風土記　和鉄の道【2】」

「播磨国風土記　和鉄の道【3】」

＊　「ベールを脱いだ「弥生の Iron Road　和鉄の道」」では、**先月掲載した和鉄の道 淡路島「弥生時代の後期の大鍛冶工房村　五斗長垣内遺跡」の記事の中で、この五斗長垣内遺跡が出現した 2・3 世紀頃、近畿地方では、近畿での鉄器の集落遺跡からの出土は少ないが、石器から鉄器への急速な変革が起こったのではないかとする話を紹**

介した。

　この時代、近畿では九州や急速に出土数を伸ばした日本海側山陰沿岸や安芸・吉備など瀬戸内沿岸に比しても 鉄器の出土数が少ない。そして、トピック的な大型鉄器も出土していない。記事はけいさいしたものの、この幻の鉄器の時代「卑弥呼の登場前の近畿地方の集落では　急速な鉄器化が進んでいた」との考え方にはどうもしっくりゆかず、この疑問について本資料にまとめました。

＊　「伊弉諾神宮 国生み神話の島」淡路島で 大量の埋納銅鐸出土【2】」では、南淡路で見つかった最古級の銅鐸その位置づけが注目されている。この松帆銅鐸の性格や位置づけについて、新たに分かったことなどを含め、地元紙神戸新聞に引き続き報道されているので、そのまま転記してご紹介。弥生時代集落から地域集団・国へと大きな集落社会変革・国づくりが進む過程で、弥生時代の末期、邪馬台国連合・初期大和を持ち出す前の時代に有力な勢力が居なかったといわれてきた淡路でも着々と国づくりが進んできた様子が垣間見える。

＊　「古代 大和への道【1】」では、大和は四方を山に囲まれる。古墳時代前期、摂津・河内には暴れ川 淀川・大和川 が瀬戸内海に流れ

くだり、河内湖が広がる。まだ馬がいなかった古墳時代前期、主要交通路はかわず時であったに違いない。瀬戸内から大和への鉄の道はどこか？ 瀬戸内海・西日本の玄関口難波から大和への入り口は 3 つである。

i．西の淀川・木津川を遡って、山城から奈良山へ超えるルート。

ii．河内・大和をまっすぐに貫く最短コース、大和川ルート。

iii．南の紀ノ川・吉野川を遡るコース

以下が続く。

「古代 大和への道【2】」

「古代 大和への道【3】紀 ノ川水系【1】」

「古代 大和への道【4】紀ノ川水系【2】」

※ 「北河内の大規模専業鍛冶工房 大県製鉄遺跡探訪」では、大和平野と河内平野を東西に隔てて北から南へ、生駒山連山と葛城・金剛の連山が壁のように続く。この壁が生駒連山と葛城連山に途切れる隙間から大和川が大和から河内・難波へ流れ下る口の所に大県製鉄遺跡がある。この山並みの両側には古代日本統一を進める大和政権を支えた渡来人や豪族たちの本拠があり、まさに畿内の心臓部。 河

内側の山裾、生駒山から葛城山山麓には数々の古代の古墳群がひろがり、平野部には大和王家陵を中心に幾多の前方後円墳が点在する古市古墳群・百舌古墳群が広がっている。近津飛鳥と呼ばれた王城の地も大和川のすぐ南にひろがっている。

＊　「大和王権 を支えた鍛冶工房 森製鉄遺跡を訪ねて」では、3世紀から5世紀にかけて、畿内には鉄の鍛冶工房集落が出現し、大和王権成立の大きな役割を果たして行く。河内の大県、大和の布留、忍海、そして、北河内の森などの鍛冶専用集落で、ここには数多くの朝鮮半島からの技術系渡来人がいたという。成立間もない倭王権にとっては国内での自給に向けた取り組みは日本統一への最重要課題であり、数多くの渡来の工人を取り込みつつ、畿内で専用鍛冶工房を展開する。そんな鉄鍛冶技術の中心にいたのが、初期大和王権の中心にいて、出雲と深いかかわりを持つ物部氏である。 物部氏の根拠地は大和の布留(現在の天理)であるが、九州・出雲から吉備・播磨そして畿内へと点々と鉄の足跡を残している。大和と河内を隔てる生駒・葛城・金剛連山の一番北端の麓、天野川が西を流れる淀川に注ぎ込む扇状平野部一体が現在の交野・私市。数多くの古代遺跡や七夕伝説など古代の先進地である。物部氏の始祖ニギハヤヒが天上より磐船に乗って

舞い降りたとの記紀伝説の地でもある。この地に物部氏の一族肩野物部氏が本拠を構え、鉄の鍛冶専用集落・大鍛冶工房を営んでいたという。現在の JR 周辺の山裾に大鍛冶工房の一つ森製鉄遺跡がある。そして、この遺跡の直ぐ背後に連なる生駒連山の北端には森古墳群・寺古墳群など製鉄遺跡と関わったと考えられる豪族肩野物部氏の古墳群が幾つかの枝尾根に広がっている。

8 世紀に作られた播磨風土記揖保の郡佐比の岡の条(現在の播磨太子町)には北河内にいた渡来の鍛冶工人が優秀な鉄鍛冶技術を有して、播磨・出雲と交流していたことを示す記事があり、この北河内がその後展開されて行く倭王権確立に大きな役割を果たした鉄の郷、和鉄の道が通っていたと考える。

＊　「飛鳥池生産工房遺跡」&「川原寺寺院工房遺跡」」

「鉄の山「三輪山」とその山麓を縫う山辺の道」

「初期ヤマト王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」再訪」

「日本初の都市の出現 纏向遺跡を歩く」

＊　「近江国 瀬田丘陵の古代製鉄遺跡群」では、瀬田川の東側から南東には広大な丘陵地が東西に延々と続き、その背後には笠置・信

楽・鈴鹿の山々がさらに続いている。この丘陵地と琵琶湖の間には大津・瀬田を入口に広大な近江平野が続く。南郷・瀬田丘陵地の製鉄遺跡の特徴は吉備の国と共に大陸・朝鮮半島で行われてきた鉄鉱石精練であり、他の地域が日本で改良された砂鉄精練であるのと大きく異なっている。日本における精練・製鉄の始りは5世紀後半ないしは6世紀初頭、鉄鉱石精練法として大陸朝鮮から技術移転されたといわれ、吉備千引かなくろ谷遺跡等が日本で製鉄が行われたとの確認が取れる初期の製鉄遺跡と言われている。大陸・朝鮮で砂鉄精練が行われていたとの実証はなく(最近朝鮮で大量の砂鉄が鍛冶工房と一緒に見つった例がでてきた)砂鉄精練は日本で大きく改良発展したと考えられているが、この時代の製鉄炉として砂鉄精練の痕跡を残す製鉄遺跡も数多多く発見されている。

図VI09は「IRON ROAD ・和鉄の道」の引用した部分に現れる遺跡の分布図である。

図 VI09　倭鉄の道の遺跡

15.3. 朝鮮の鉱業

「韓国の鉱業」の 鉄鉱業では、韓国では 1958 年 から 1959 年にかけて鉄鉱床賦存の可能性が多い地域,44,867km2 に対して空中磁力探査を実施 した。 その結果は非常によい ものではなかったが勿禁鉄山(慶尚南道梁山郡),京 仁鉄 山(京畿道仁川),蔚山鉱山(慶尚南道蔚山郡)など,確定鉱量 100 万 t 前後の高品位磁鉄鉱鉱床を初め,多数の小規模鉱床がその後の探 査によって開発されている。嚢陽鉱山(江原道嚢陽郡)は月に 25,000t の精鉱を生産している国内最大の鉄鉱山である。金谷鉱山と忠州鉱山(共に忠清北道中原郡)は磁鉄鉱と赤鉱鉄の不規則な混合体であるが,その他の鉱山の鉱石は磁鉄鉱のみである。なお諸鉱山の粗鉱品位は比較酌高いので手選法による選鉱をしている鉱山も多い。最近,巨道鉱山では金,銀,銅鉱の浮選と鉄鉱石の磁選をして非常によい結果を得ている。1964 年の鉄鉱石(Fe56%)生産量は 684,828t で あっ た。

主要鉱 山分布図

「韓国の金属鉱床の近況について」では、韓国の花崗岩類と関連タングステン-モリブデン鉱床の分布に磁鉄鉱系とチタン鉱床系が図示

されている。加里山から左下がりに分布し、忠清南道の唐津・瑞山・泰安至るものと、真ん中辺りから分かれ、益山・扶安にいたるものが主である。これと離れて、栄州・丹陽辺りにも分布している。全羅南道と慶尚道にはない。

太白山→俗離山→小白山脈 以北となる。また、鉄を産出した弁辰は上の分布範囲にあったと考える。

楽浪郡が辰韓８か国を併合しようとしたのは、鉄資源か ？

「加里山」では、**江原道、洪川郡にある加里山(1,051m)は山頂に岩山が突き出ている変わった姿をしている山である。ソウルから新たに完成した春川高速道路で約２時間の場所に加里山自然休養林という場所があり若者や家族連れなどが宿泊し自然の学習が出来る場所が登山口になっている。**

Wikipedia「朝鮮民主主義人民共和国の鉱業」では、

朝鮮半島では、北の鉱工業、南の農業、という言葉がかつてあったほど、金などをはじめ北部の山岳地帯で様々な鉱物が採掘されてきた。大韓商工会議所が 2007 年に出した報告書によれば、マグネサイ

ト、タングステン、モリブデン、黒鉛、蛍石など7種類の鉱物の埋蔵量が世界トップ10に入る。同年までに把握されている北朝鮮の鉱山は約760か所であり、そのうち30%が炭鉱である。同国の地下資源は200種類以上に達し、経済的価値を有する鉱物だけでも140種類を超えると見られる。

朝鮮半島では広く砂金が産出し、古代から容易に採取されていた。李氏朝鮮において鉱山は国有化され、私有化は厳しく規制されていた。官によって金、銀、銅、鉄、鉛や硫黄、珠玉などが採掘され、貨幣の鋳造や武器および農器具の生産などに用いられた。しかし世宗は金銀鉱山の開発を禁止したと言われるなど、歴代の王朝は開発に消極的だったとされる。文禄・慶長の役で朝鮮に侵攻した加藤清正は、咸鏡南道端川郡の檜億銀山で銀を製錬し、豊臣秀吉に献上したという。

鉄鉱石は、咸鏡北道茂山郡の磁鉄鉱、黄海南道殷栗郡および載寧郡の赤鉄鉱・褐鉄鉱、咸鏡南道利原郡および北青郡の赤鉄鉱などが代表的である。茂山鉱山は推定埋蔵量 15-20 億トンの北朝鮮最大の露天掘り鉱山であり、年間350万トンを算出している。

15.4. DNA 解析

分子遺伝学という分野がある。Wikipedia の同項目では

分子遺伝学(molecular genetics)は生物学の研究分野であるが、二つの異なる分野を指す。塩基配列の比較から生物の進化を議論する分野と、遺伝現象の仕組みを分子のレベルで理解しようとする分野である。

（前者について） **遺伝情報として生物が有する DNA や RNA は、種の進化とともに変化する。この変化を観察することである生物種(やウイルス等の非生物も)がどのように分化したかを調べる。形態的な分類による古典的な分類学に対し、塩基配列や酵素多型と行った遺伝情報から分類する。理論的な体系は、木村資生の中立進化説により確立された。現在でも中立説は遺伝子進化を解析する際に非常に重要な理論的基盤を提供している。この分野は、分子進化学、あるいは分子系統学（系統学の一分野として)、分子分類学（分類学の一分野として）などとも呼ばれる。**

（後者について） **遺伝情報を記述する遺伝子の化学的本体が DNA であり、その塩基配列によって蛋白質の構造が記述されていることが明らかとなっている今日では、遺伝学や分子生物学、あるいは遺伝**

子工学において用いられる基本的かつ重要な手法となっている。

核 DNA 解析が確立したのは最近である。進化の解明から、移動の推測も可能となり、日本列島への人の移動が解析できるようになった。新しい分野であり、平易な文献は少ない。

＊　「yomiuru online:深読みチャンネル:2017 年 12 月 15 日　05 時 20 分」では、**日本人のルーツの一つ縄文人は、きわめて古い時代に他のアジア人集団から分かれ、独自に進化した特異な集団だったことが、国立遺伝学研究所(静岡県三島市)の斎藤 成也 教授らのグループによる縄文人の核 DNA 解析の結果、わかった。現代日本人(東京周辺)は、遺伝情報の約 12%を縄文人から受け継いでいることも明らかになった。縄文人とは何者なのか。日本人の成り立ちをめぐる研究の現状はどうなっているのか。核 DNA 解析でたどる日本人の源流(河出書房新社)を出版した斎藤教授に聞いた。**

という記事から抜き出す。これは、研究者へのインタビュー記事であることから、読み易いものである。

「遺伝的に近かった出雲人と東北人」

数年前、島根県の出雲地方出身者でつくる東京いずもふるさと会から国立遺伝学研究所に DNA の調査依頼があり、斎藤教授の研究室が担当した。21 人から血液を採取して DNA を抽出、データ解析した。その結果、関東地方の人たちのほうが出雲地方の人たちよりも大陸の人びとに遺伝的に近く、出雲地方の人たちは東北地方の人たちと似ていることがわかった。

衝撃的な結果でした。出雲の人たちと東北の人たちが、遺伝的に少し似ていたのです。すぐに、東北弁とよく似た出雲方言が事件解明のカギを握る松本清張の小説砂の器を思い出しました。DNA でも、出雲と東北の類似がある可能性が出てきた。昔から中央軸(九州北部から山陽、近畿、東海、関東を結ぶ地域)に人が集まり、それに沿って人が動いている。日本列島人の中にも周辺と中央があるのは否定できない、と指摘。出雲も東北地方も同じ周辺部であり、斎藤教授はうちなる二重構造と呼んで、注目している。その後、新たに 45 人の出雲地方人の DNA を調べたが、ほぼ同じ結果が得られたという。

「日本列島への渡来の波、2 回ではなく 3 回?」

斎藤教授は、このうちなる二重構造をふまえた日本列島への三段

階渡来モデルを提唱している。第１段階(第１波)が後期旧石器時代から縄文時代の中期まで、第2段階(第2波)が縄文時代の後晩期、第3段階(第3波)は前半が弥生時代、後半が古墳時代以降というものだ。第1波は縄文人の祖先か、縄文人。第2波の渡来民は海の民だった可能性があり、日本語の祖語をもたらした人たちではないか。第3波は弥生時代以降と考えているが、7世紀後半に白村江の戦いで百済が滅亡し、大勢の人たちが日本に移ってきた。そうした人たちが第3波かもしれないと語る。

　このモデルが新しいのは、二重構造モデルでは弥生時代以降に一つと考えていた新しい渡来人の波を、第2波と第3波の二つに分けたことだという。この二つの渡来の波があったためにうちなる二重構造が存在している、と斎藤教授は説く。

　第3波の解析が進めばと思っている。データ解析の詳細がわからないが、どの程度の移住者がいたかの推測ができないか。

以下で、目にとまったウェッブ・ページを挙げていく。

＊　Wikipedia「日本人」では、DNA 分析の結果も取り入れられている。これは 6 系統→ 6.1 分子人類学による説明 に書かれているが、

かなり長い。

＊　「日本人はどこから来たのか？ ～MYCODE セミナー「ミトコンドリア DNA でたどる日本人のルーツ」【レポート】」

＊　「ヤポネシアン　ゼロ巻ゼロ号　新学術領域研究ヤポネシアゲノム季刊誌」

＊　科学研究費助成事業　研究成果報告書

「全ゲノム解析法を用いた縄文人と渡来系弥生人の関係の解明」の４．研究成果（まとめ）は興味あるが、読み砕くのは難しい。

＊　「ゲノムから読み解く日本人の起源　斎藤成也」（パワー・ポイント）は、講演におけるパワー・ポイント画像を公開したものであり、説明なしで理解することは難しい。

以下は動画である。大まかな理解にはこちらのほうが有効と考える。

＊　「未来を創る科学者達　（６）遺伝子に隠された日本人の起源～篠田謙一～」

＊　「中国人・韓国人と、日本人の DNA の違い」

以下は書籍である。

＊　斎藤成也「DNA から見た日本人」ちくま新書、2005（絶版）

＊　斎藤成也「日本人の源流」河出書房新社 2018

インテルメディオ　(Part VI あとがき)

正史(神話的部分を除く)から寄り道をして、幾つかの話題を見てきた。

国産み神話からは、神武東征で空白となっていた地域が埋められた。想いつくところは含まれているので、あとは、これらと東遷と結び付けられるかである。

神社では、六国史における最終神階が3位以上の神社で、奈良・京都を除く近畿以西のものを主に見てきた。ここで、初めて知ったことは、伊弉諾神宮・宇佐神宮・吉備津神社が品位であることと、久留米の高良大社が従一位と高位であることである。また、Wikipedia「宇佐神宮」に書かれている、八幡宇佐宮託宣集には、筥崎宮の神託を引いて、「我か宇佐宮より穂浪大分宮は我本宮なり」とあり、筑前国穂波郡(現在の福岡県飯塚市)の大分八幡宮が宇佐神宮の本宮であり、筥崎宮の元宮である、については、飯塚市辺りは投馬国の候補であり、興味を抱いた。

図VI01国産み神話の地名と図VI02表VI03の神社とでは、かなりのものが重なっている。これらは、倭の東遷につれ、倭王の住む宮から後背の兵站、あるいは、地域支配の拠点となったのではないかと考

えている。

神階については、六国史によっているようである。六国史は維基文庫に収録されているので、見ることは容易であり、今後の課題としたい。豪族との関連を調べていくことになると考えている。神階が付与されている神社は 200 社ほどあり、かなりの作業量が予想される。

ここまでは、ある程度利用できる話題であった。この後は、関連すると思われるが、殆ど利用できていない話題の紹介記事を引用した。

14 章は、古代史以降と歴史に近い分野の話題である。15 章で採り挙げたものは、理工系の話題ともいえる。

ここで取り挙げたものの他にも、放射性炭素年代測定はかなり知られている。例えば、日本における土器編年と炭素 14 年代 では

縄文土器の編年に絶対年代をあてる作業は，炭素 14 による年代測定によって 1951 年に始まった。炭素 14 年代の役割は，細別・大別した編年に実年代を与えること，日本列島内での異なる文化同士や，日本と直接的に結びつかない世界各地の文化とを比べるさいの目安を得るところに向けられた。その結果，縄文土器文化以前の「無土器文化」がヨーロッパの旧石器時代文化と年代的にほぼ併行すること，縄

文土器の起源は 10000 年前ごろまでさかのぼることを明らかにするなど，大きな役割を果たした。 最近始まった加速器質量分析（AMS）法による炭素 14 年代測定は，精度において飛躍的な進歩をとげている。AMS 法は放射性炭素のイオンの数を 1 個 1 個数える直接的な測定方法である。測定誤差は±20～±30 年であって，その精度の高さは，神奈川県箱根埋没スギや青森県三内丸山遺跡で実証されている。いま，考古学上の大きな問題を解決するために炭素 14 年代を積極的に導入する段階にいたっている。

と書かれている。炭素 14 年代測定は知識としてはかなり前から知っていたが、古代史には用いることはできないとしてきた。改めて調べてみると、Beta Analytic からは、かなりのものが測定可能なようであるが、装置も大掛かりなものになっているようである。

鉄・土器・石などの成分分析から、原産地が推定できるという話題を見た記憶がある。定かでないが、ヒスイか黒曜石が産地からかなり広がっていることが成分分析からわかったということである。質量分析と呼ばれる分野のようであるが、これはさらに理解できていない。Wikipedia「質量分析法」では、

高電圧をかけた真空中で試料をイオン化すると、静電力によって

試料は装置内を飛行する。飛行しているイオンを電気的・磁気的な作用等により質量電荷比に応じて分離し、その後それぞれを検出することで、マススペクトルを得ることができる。

質量分析では、試料分子が正または負の電荷を１つだけ持ったイオンの他、2価以上に荷電した多価イオン、イオン化の過程、あるいは装置を飛行中に解離したイオン(フラグメントイオン)、あるいは試料同士が会合した会合イオンなどが生成する。また、通常では分子は同位体を含んでおり、それぞれのピークはこれに由来する分子固有の分布をもって現れる。

マススペクトルはこれらの情報が全て含まれているため、場合によってはかなり複雑なスペクトルとなる。したがって、未知物質のマススペクトルを帰属することは容易ではない。 逆に、この豊富な情報量は、既知物質の同定や未知物質の構造決定にはきわめて強力な手段となるため、有機化学や生化学の分野で非常に多用され、また重要な分析法となっている。

ということである。鉱石や土などは、産地により成分が微妙に異なることから、原産地が特定できるかもしれないということである。

炭素14年代測定では、炭素を含む遺物に対し、その絶対年代を測

定でき、質量分析では、構成する分子がわかるということである。一方、DNA 解析では、動物の設計図と言える遺伝子が解明できるということである。

初期の炭素 14 年代測定装置と DNA 解析装置、および、質量分析装置は研究室レヴェルでも設置可能のようであるが、炭素 14 年代測定装置の最新のものは研究所レヴェルのようである。DNA 解析に関しては、データ・ベースが出来ているようである。塩基配列は 3 種の塩基の 1 次元的データであるため、保存と検索が容易である。炭素 14 年代測定は結果は数値であるため、保存がかのうである。マススペクトルは一見画像データのようであるが、個々のスペクトルは、位置と大きさの 2 つのデータであろう。土器や金属の炭素 14 年代とマススペクトルの、データ・ベースができれば、客観的な判断が可能となると想うが、研究所のセンターレヴェルの規模であろう。

Part VI 目次

序

13.　国産み神話の島々と神社　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

序

13.1.　国産み神話の島々(国々)　7

13.2.　神宮と大社　17

13.3.　各神社概要　32

14. 古墳と土器のおさらいなど　・・・・・・・・・・・・・・・・・　48

序

14.1.　畿内の古墳　50

14.2.　古墳のおさらい　59

14.3.　土器のおさらい　73

14.4.　壬申の乱と南北朝　80

14.5.　官職など　84

大宰・総領、五畿七道、平氏の都落ち、織田信長

15.　海流・和鉄・DNA 解析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　93

序

15.1.　海流と船　95

15.2.　和鉄の道　104

15.3.　朝鮮の鉱業　119

15.4.　DNA 解析　122

インテルメディオ　(Part VI あとがき)　128